
銀魂～冷血の鬼姫の日常～

ナナフシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂〜冷血の鬼姫の日常〜

【Nコード】

N5198Y

【作者名】

ナナフシ

【あらすじ】

ちよつとした趣味で書いてみました。

銀時に義兄妹が居たら？っと思つて書いてみました。

二次小説なんて初めてなので上手く書けたか不満です。

まあ、あらすじを書いてみますか。

攘夷戦争時、白夜叉の隣に立っていた女が居た。

女の名は雨宮咲、咲は『冷血の鬼姫』と言われていた。

咲は無表情で天人を斬る事からそう呼ばれた。

敵から恐れられた武神である。

そして、今、その咲が銀時の目の前に現れて万事屋に入る。

万事屋トリオと咲が織りなすコメディ―？だと思っています。

シリアスならごめんなさい。

それが嫌な方は回れ右！

咲は銀時の事が好きと言う設定なのでよろしくお願いします。

第一訓　義妹

歌舞伎町を一人の女が歩いていった。

その女の人は超美人である。

彼女の水色の髪を靡かせて歩いていた。

腰には木刀を挿している。

すれ違う度に男の人がその女に釘付けである。

女は空を見上げた。

「この町に居るのかな……銀兄さん」

女はそう呟いた。

女は歩き出した。

「誰かに聞いてみようかな」

女は辺りを見回した。

「あ、あの子に聞いてみよ」

女は眼鏡を掛けた青年に近づいた。

「あの、聞きたい事があるんですが」

「あ、はい、何でしょうか？」

女が喋りかけたのは、地味眼鏡の志村新八であった。

「誰が地味眼鏡だコラァ！」

新八は地の文にツツコンだ。

ツツコンでも意味ないのにね。

「あの、誰に言ってるんですか？」

「ああ、すみません。何かバカにされた気がして」

新八は女にペコツと謝った。

「それで何か用ですか？」

「えーと、人を探しているんですが……」

「特徴とか、名前は？」

「銀髪で天然パーマで年中死んだ魚の様な目をした男で、名前は坂田銀時」

「え？銀さんに何か様ですか？」

新八は女に尋ねた。

「え、知り合いなの！？」

女は新八に詰め寄った。

「は……はい」

新八は頷いて答えた。

「銀さんが営んでる万事屋で働いている志村新八です」

「私は雨宮咲です」

女はそう名乗った。

「案内してくれませんか？」

「え？はあ、今向かう所なので良いですよ」

新八は承諾した。

「ここです」

新八は万事屋銀ちゃんの前まで来ていた。

「ここかア」

咲はそれをじいっと見ていた。

「こっちです」

新八は階段を上がり始めた。

「あ、はい」

咲はその後をついていった。

「ただいま戻りました銀さん」

新八は万事屋のドアを開けて入った。

咲もそれに続いて入った。

そして、リビングに行くと言髪で天然パーマの男がデスクに座ってジャンプを読んでいた。

その男は坂田銀時である。

ソファでは、オレンジ髪の少女が居た。
少女は神楽である。

「銀さん、客人ですよ」

「あ？誰だ……………！！」

銀時はジャンプから目を離して咲を見ると驚いた。

「さ……………咲！」

「見つけた銀兄さん」

咲はニツコリ微笑んだ。

新八と神楽は咲の言葉を聞いて驚いた。

「ぎ、銀兄さん！？」

「銀ちゃんの兄妹アルカ！」

「血は繋がってないけど、義兄妹だよ」

咲が銀時の代わりに答えた。

「咲……………テメエ生きてたのか？」

「酷いなア、勝手に殺さないでよ」

咲はそう言った。

「私は銀兄さんが生きてて安心したよ」

「あ、ああ」

銀時は頷いた。

「で、何しに来たんだ咲」

「銀兄さんに頼み事があった」

咲は銀時に近づいた。

「何だ？」

「ここに住ましてくれない？」

咲はそう言った。

「うーん、どうs「ダメ？」うつ」

咲は上目遣いで銀時を見る。

「良いよね？」

+ 涙目。

銀時は我慢の限界であった。

「わかった！わかったよ！ここに居ろや！」

銀時はそう答えた。

「ありがとう銀兄さん！」

咲は銀時に抱きついた。

「ハア……たくっ」

銀時はそんな咲の頭を撫でた。

万事屋メンバーに咲が加わった。

第一訓〜義妹〜（後書き）

作者「どうも、作者のナナフシです」

咲「オリキヤラの咲です」

作者「色んな二次小説を読んできたと書きたくなったので思い切って書いちゃいました」

咲「銀魂〜冷血の鬼姫の日常〜を読んで頂きありがとうございます」

作者「上手く書けてるか心配ですが、前向きに書いていこうと思います！」

咲「これからも……」

作者・咲「よろしくお願いします！」「」

咲のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「はつきり言って僕服装のセンスないから咲の服装思いつかないからその人の想像に任せます」

咲「キャラ紹介なのに!？」

銀時「ダメ作者だな」

ナナフシ「うん、自覚してるから」

咲「否定しないの!？」

ナナフシ「自覚はあるから」

銀時「つまり認めてるんだな？」

ナナフシ「ああ、そして……銀さんのシスコン!」

銀時「俺はシスコンじゃねえ!」

ナナフシは銀時に木刀で殴られる。

ナナフシ「ゴフアアアア!」

咲「あはははは……では、今回は私のキャラ紹介です……どうぞ」

咲のキャラ紹介

名前 雨宮 咲

年齢 19歳 誕生日10月19日

好き 甘い物、銀時

嫌い 辛い物、土方、今の高杉（昔は嫌いではなかった）

髪 水色

瞳 赤色

すごく美少女なのだが、銀時の事が好きなブラコン。

銀時の事を「銀兄さん」と兄と呼んでおり、銀時も義妹だと認証している。

剣の腕は銀時の次に強く、攘夷戦争に参加した経験がある。

攘夷戦争では“冷血の鬼姫”と呼ばれていた。

過去の戦いの……“冷血の鬼姫”の頃の記憶が蘇ると無表情で相手に襲いかかる。

たとえ攻撃を受けても無表情である。（ダメージを喰らってる事は喰らってます）

今では銀時と同じ様に「自分の大切なものを護る」と言う思念を貫いています。

新八の事は「新八さん」、神楽の事は「神楽ちゃん」と呼んでいます。

よく銀時と喧嘩する土方を嫌っている。

ナナフシ「こんなもんでしょうか」

咲「まあ、読者から感想を貰って、まだ教えてほしい所があるなら書けばいいんじゃない？」

ナナフシ「そうですね！服装以外なら咲の教えてほしい所を受け付けます！」

銀時「頑張れナナフシ」

ナナフシ「おうよ銀さん！」

咲「それじゃあ、私のキャラプロフィールは終わりです」

咲のキャラ紹介（後書き）

ナナフシ「今回は咲が歌舞伎町を歩き回ります」

咲「もちろん銀兄さんと一緒だね？」

ナナフシ「え」と、それはまだ「一緒だね？」は……はい！」

ナナフシの首には何処から持ち出してきたのか知らないが刀が向けられていた。

咲は顔が無表情だった。

ナナフシがそう答えると刀を鞘に収めた。

ナナフシ「ふ、ふう、助かった。さてと今回は“第二訓”咲の歌舞伎町周り」です！」

咲「次回もよろしく願います！」

第二訓　咲の歌舞伎町周り（前書き）

咲「親父にもぶたれた事ないのに！」

銀時「急にどうした咲！？」

咲「いや、作者のナナフシにこれを言っつて言われたから」

銀時「思いつきりガ　ダムじゃねえか！」

ナナフシ「いやあ、今のアニメ銀魂は蓮蓬編じゃないですか？あれでガン　ム出てきたし……咲に言わせてみようかなって」

銀時「思えばナナフシは　ンダムも好きだったな」

ナナフシ「はい！後は銀さんお願いします！」

銀時「おう！“銀魂　冷血の鬼姫の日常”始まるぜ！」

第二訓　咲の歌舞伎町周り

咲が万事屋に入って次の日……。

「銀さん！今日は仕事もないし、咲さんに歌舞伎町を案内してあげましようよ！」

いきなり新八がこんな事を言い出した。

今日はって……滅多にないくせに。

「本当！」

咲は顔を輝かせて答えた。

「ああ？んなもん怠いから新八と神楽で案内をしてこいよ」

銀時は頭を掻きながら言った。

「銀兄さん……案内してよ……」

咲は前回と同じく上目遣いで攻めてきた。

「嫌だn「お願いだよ」……うつ」

+ 涙目……てか、前回と同じじゃん！

銀さんがまず怯むとは……恐るべし咲！

「だあ！わかった！案内してやれば良いんだろ！」

銀さん……咲の攻撃にあえなく撃沈。

「ありがとう銀兄さん！」

咲は銀時にお礼を言った。

ちゃんとお登勢には話を通してある。

銀時はその時お登勢にアッパーされたらしいが。

万事屋メンバーは咲に歌舞伎町を案内する事になった。

「……で、何で腕組み？」

銀時は咲を見た。

銀時と咲は腕組みをしていた。

「銀さん……僕達から見れば恋人同士に見えるんですが……」

新八は銀時にそう言った。

「いや、俺と咲は義兄妹だから」

銀時はそう答えた。

「あ、お花屋さんだ」

咲は花屋を見つけて近寄った。

銀時、新八、神楽は顔が青ざめた。

「色んなお花があるな」

咲が見ていると。

「いらつしゃいませ」

中から出てきたのは、鬼の様な顔をして、緑色の人物……

「初めまして、僕、花屋をやっています。屁努紹ヘトリロです」

赤い眼を光らせて、恐ろしい声で自己紹介した。

それを見た咲は冷や汗を流し、顔を青くした。

そして、銀時の方を向き、涙目で助けての目線を送った。

屁努紹は万事屋トリオを見つける。

「おや、坂田さんに志村君に神楽ちゃんじゃないですか」

「ど、どうも……屁努紹様……いや、屁努紹伯爵」

銀時は引きつった顔で挨拶した。

「屁努紹で良いですよ。彼女は坂田さん達の知り合いで？」

「そ……そうです……」

新八も引きつった顔で答えた。

咲は銀時に涙目ですがみついて、体をブルブル震わせている。

「そうですか。お名前は？」

「あ……雨宮咲です……」

「雨宮さん、これからよろしくお願いします」

屁努紹は笑った顔で言った。

それが更に恐く見えた。

そのまま、ヘドロの森を出た。

「こ……恐かったよオ」

涙目で今だ銀時にしがみついている。

「ま、まあよく頑張ったじゃねえか」

銀時はそんな咲の頭を撫でる。

公園に入ると、サングラスをかけたおっさんがベンチで横になっていた。

「よお、長谷川さん」

銀時はその男の事を長谷川と呼んだ。

「ああ、銀さん達か……その子は？」

「初めまして、雨宮咲です」

「俺は長谷川泰三だ」

「マダオこんな所でどうしたアルカ？」

「マダオ？」

「だから俺はマダオじゃないって！」

長谷川はマダオを否定した。

「神楽ちゃん、マダオって何？」

「まるでダメなおっさん、略してマダオアル」

「まるでダメなおっさん……」

咲は長谷川を哀れみの目で見た。

「ちよっ！咲ちゃんがひいちゃってるじゃん！」

「まだまだ色々アルネ。まるでダメな夫、まだまだ墮落するおつさんとかネ」

咲は更に哀れみの目を向けた。

「その目をやめてええええええええええ！」

長谷川は大声で叫んだ。

長谷川と別れて歌舞伎町の町を歩いていると。

「む、銀時と新八君とリーダーではないか」

銀時達に話し掛けたのは黒髪で長髪の男だった。

隣には、白いペンギン？が居た。

「よお、ツラ、エリザベス」

「ズラじゃない桂だ……咲ではないか！」

「久しぶりヅラさん」

「ズラじゃない桂だ！」

銀時達に話し掛けたのは、攘夷志士の桂小太郎である。

その隣に居るのはエリザベスである。

「ヅラさん……これ何？」

咲はエリザベスを見て桂に聞いた。

「ヅラじゃない桂だ。こいつはエリザベスだ」

『どうも、エリザベスです』

エリザベスは文字が書かれたプラカードを出して挨拶した。

「ど、どうも」

咲は戸惑いながらも挨拶をした。

「咲も居る事だし……銀時、咲よ！今こそ攘夷志士になると」

「嫌だ（だよ）」

二人の返答はハモった。

「何故咲まで！？」

「もう私は攘夷は真っ平ゴメンだよ。また仲間が死ぬ所は見たくないもの」

「咲さんも攘夷戦争に参加していたんですか！？」

「うん」

新八と神楽は咲が攘夷戦争に参加していた事に驚いた。

「白夜叉の隣に立ち、無表情で天人を斬る事から“冷血の鬼姫”と呼ばれたお前と銀時の力さえあれば！！」

「ヅラ、前にも言ったが、もう俺達の戦は終わったんだ。まだわからねえのか？」

「それでもd「桂アアア！」」

ズドォーン！

バズーカが何か撃つ音が聞こえた。

そして……ドカァン！

爆発した。

桂とエリザベスはそれを避けた。

飛んできた方を見ると……黒い制服を着た男二人が立っていた。土方と沖田である。

「ちっ、真選組か！さらばだ銀時、咲！」

桂とエリザベスは走っていった。

「後を追いかけるぞ総悟！」

「わかってますぜい」

二人はパトカーに乗り、桂とエリザベスの後を追った。

銀時達はと言うと……爆発へアーになっていた。

こうして、歌舞伎町案内は終わった。

第二訓　咲の歌舞伎町周り（後書き）

ナナフシ「最後が爆発へアーで終わりでした！」

銀時「ふざけんじゃねえぞ！ナナフシ！」

咲「別の終わり方はなかったの！？」

ナナフシ「いや、思いつかなかった」

銀時・咲「おい！！」

ナナフシ「では、第二訓終了です。次回からは銀魂の原作を使います」

咲「オリジナルストーリーも考えてるんだよね？」

ナナフシ「はい、オリジナルストーリーではオリキャラが出てきます」

銀時「それネタバレじゃねえか？」

ナナフシ「どうせ、オリジナルストーリーの時点でわかっている人も居ますよ」

銀時「たくっ」

ナナフシ「それではさようなら！」

第三訓く真選組に女隊士が来たく（前書き）

ナナフシ「オリキャラが思いついたので出す事にしました」

銀時「チンピラ警察共のかよ」

咲「第二のオリキャラも女なんだね」

ナナフシ「はい……キャラプロフィールは次回つつう事で」

銀時「そんじゃ、さっさと始めんぞ」

ナナフシ「はいはい、それではどうぞ！」

第三訓　真選組に女隊士が来た

「おい、新しく入ってくる奴知ってるか？」

「ああ、何でも女なんだろ？」

「こんな野郎しか居ない所に女が来るなんてな」

「何でも土方さんの知り合いだとか」

真選組はこの話題で持ちきりであった。

「局長、副長、来ました」

中に入ってきたのは山崎だった。

「入れる」

「わかりました！」

土方が山崎にそう言うのと女の人の中に入ってきた。

黒髪で、なかなかの美女である。

黒い瞳で土方と近藤を見る。

「真選組に入る事になりました、白瀬　葵です。よろしくお願いします」

葵は近藤と土方に挨拶した。

「よく来たな葵ちゃん！」

近藤は笑った顔で葵を迎えた。

「はい、久しぶりですね近藤さん」

葵も挨拶をした。

「土方さんも久しぶりです！」

土方にも挨拶をした。

「おう」

土方は短く答えた。

「それじゃあ、皆に葵ちゃんの事紹介するからついてきて」

「はい」

近藤と土方の後を葵は追いかけた。

そして、隊士達が集まっている引き戸を近藤は開けた。

隊士達が戸の方を見る……視線は葵に行く。
男共が葵に群がる。

「新しく入る女隊士って君？」

「はい……」

「名前は？」

「白瀬 葵です」

「趣味は？」

「え、え」と

ドンドン来る質問に葵は戸惑った。

「お前等、座れ」

土方が言つと皆渋々戻っていった。

そして、土方と近藤は葵を連れて隊士達の前に来た。

「今日からウチに入る事になった」

近藤が言い出した。

「白瀬 葵です！よろしくお願いします！」

葵はお辞儀をした。

『よろしくお願いしまアアす！』

もの凄い大きな声が帰ってきた。

そりゃ、真選組は野郎の集まりだからね。

美女が来たとなれば、そうなるわ。

葵の挨拶が終わった後、葵の歓迎会を開く事にした。

「え、葵ちゃんの真選組就任を祝ってかんぱい！」

『かんぱい！』

近藤の合図に皆は酒を飲んだり、料理を食べたり、葵に質問したり、色んな事をしていた。

「久しぶりでねエ、葵」

「あ、沖田さん。久しぶりです」

葵は沖田にも挨拶をしました。

「酒飲みやせんか？」

「いえ、未成年なので結構です。って言うか、沖田さん……あなた

も未成年ですよね？」

「気にしちゃダメでエ」

沖田は酒を飲み始める。

「こいつはいつもの事だ」

「あ、土方さん」

土方がやって来た。

「死ねや土方アアア！」

もう完全に沖田は酔っぱらっていた。

刀で土方に斬りかかった。

酔うのが早いって？気にしちゃダメだよ。

それを土方は刀で受け止めた。

「総悟デメエ……いい加減にしろよ」

「今日こそ副長の座は貰いますぜ」

「上等だコラア！かかってこいや！」

土方と沖田の喧嘩が始まった。

「あははは……これも相変わらずだな」

葵はそれを見て苦笑いした。

こうして、真選組に葵が仲間に入った。

第三訓 真選組に女隊士が来た (後書き)

ナナフシ「今回は短いですが、これくらいd」ナナフシイイイイ
！「ん？銀さんつてゴフアアアア！」

ナナフシは銀時の跳び蹴りを喰らった。

ナナフシ「急に何するんですか!？」

銀時「急に何するんですか!?!じゃねえだろがああああ!という
事じゃああああ!主人公である。俺と咲が出てねえじゃねえか!」

ナナフシ「しょうがないだろ!今回はオリキャラを出す為のストー
リーだったんだから!」

咲「銀兄さん、今回はしょうがないよ」

ナナフシ「咲を見なさい!あんたみたいに出番ばかりにこだわって
ないわよ!少しは見習いなさい!」

銀時「お前は俺の母ちゃんか!？」

咲「……いい加減二人共……静かにしてよ……いくら銀兄さんでも
容赦しないよ?」

咲の顔は無表情だった。

ナナフシ(やばい!あの顔は“冷血の鬼姫”の顔だ!)

銀時(いや、まだ完全じゃねえ!無表情でも鬼の様な視線の鋭さが
感じらんねえ!一歩手前だ!)

ナナフシ・銀時(謝っておくなら)

ここで二人の心はシンクロする。

ナナフシ・銀時(今しかない!)

ナナフシ・銀時「咲さん……」

咲「何?……」

ナナフシ・銀時「すみませんでしたあ!」

咲「仲良くする?」

ナナフシ・銀時「します!します!」

咲「よろしい」

咲の顔はいつもの優しい顔に戻った。

銀時「た、助かった」

ナナフシ「では、次回は葵のキャラプロフィールです！」

葵のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「今回は葵のキャラ紹介をしたいと思います」

咲「今回から前書きと後書きにも参加するんだよね？」

ナナフシ「はい、そうです」

銀時「それじゃ、葵よろしくな」

葵「はい、旦那」

銀時が言っていると葵が現れた。

葵「今回から前書きと後書きにも参加させて頂く葵です。よろしく」

ナナフシ「この四人で、前書きと後書きはお送りします」

銀時「それじゃ、始めますか」

葵「はい、私のキャラ紹介です。どうぞ」

葵のキャラ紹介

名前 白瀬 葵

年齢 18歳 誕生日5月9日

好き 真選組の皆（特に土方）、果物

嫌い 野菜、幽霊

髪 黒色

目 黒色

真選組に入ってきた美少女。

土方の事が好きであり、よく土方と居るのが多い。

銀時の事を「旦那」と呼ぶ。

真選組では、剣の腕は沖田と一、二を争う。

咲とは仲が良い。

ナナフシ「これで良いかな？」

銀時「最後の説明少なくてねえか？」

ナナフシ「だって、攘夷戦争に参加していた訳じゃないから咲とは違ってそれは短いよ」

葵「でも、もうちょっと長く出来なかったの？」

咲「そうだよ、ナナフシ」

ナナフシ「すみませんね。それはそうと咲の剣術が決まりました」

咲「本当！」

ナナフシ「はい、咲は我流で静なる剣です」

咲「つまり、銀兄さんの剛の剣とは逆なんだね」

ナナフシ「はい、咲の剣は静なる剣を極めた感じですね。一本の剣で行う連続の突きが数本に見えたりする設定にしています。これで

“冷血の鬼姫”が目覚めたら凄い事に」

葵「語り出したらキリがないよ」

ナナフシ「おおっと、そうだった」

葵「それでは、私のキャラプロフィールは終わりです」

葵のキャラ紹介（後書き）

ナナフシ「今回はオリジナルストーリーにするべきか……原作を使うべきか……どちらか悩んでいます」

咲「オリジナルストーリーが良いと思うな」

ナナフシ「そうですね、でも、原作を使って咲が居る万事屋も書いてみたいし」

銀時「さつさと決めろや」

ナナフシ「ああああああ！もう、真相は次回つつ事で！」

銀時「一樣、オリジナルストーリーが良いか、原作を使うか、読者から募集中」

咲「ない場合は次回をナナフシが決めるみたいだから、締め切りは

……次回が投稿されたらで！」

葵「投稿された後に来た場合はご了承ください」

銀時「まあ、こいつの場合明日だろうけどな、次話投稿」

ナナフシ「それでは」

ナナフシ・銀時・咲・葵「……また次回……！」

第四訓　漆黒の狗

「はあ、暇だな」

「そうアルナ」

「銀兄さん、神楽ちゃん……本当に全然依頼来ないね」

「これが当たり前です。咲さん」

四人共、それぞれ言った。

「あれ？思えば咲さんの木刀変わってませんか？」

咲の腰には、柄に『支笏湖』と彫られた木刀があった。

「うん、ちよつとね」

実はたまたま銀時が木刀を通販で買っている所を見て、同じ木刀にするために銀時に頼んだのだ。

あの方法で。

「そうですか」

新八はそう言った。

「私ちよつと外行ってくるね」

咲はそう言つと万事屋を出て行った。

「気をつけてなア」

銀時はそう言つて見送った。

咲がしばらく町を歩いていた。

「外に出てきたのは良いけど暇だなア」

咲はそこら辺をブラブラしていた。

ドンッ。

すると、誰かにぶつかった。

「あ、すみません」

「こつちも悪かったな……ってお前は隊士達がよく言っていた万事屋に入った奴か」

咲がぶつかつたのは土方だった。

「え？銀兄さん達を知ってるんですか？」

「ああ、腐れ縁だな。俺は土方十四郎だ」

「ああ、銀兄さんがよく言っていた大串さんですか」

「誰が大串だ！土方だ！ひ・じ・か・た！」

「はいはいわかりました」

咲は適当に流した。

「なんか出会って早々嫌われてね？」

「銀兄さんとよく喧嘩してる人だと聞いて……このマヨラー」

「何だろっ……こいつに言われたらめっちゃ心が痛い」

土方は胸を抑えた。

「土方さん！どうしたんですか！？」

「葵か」

葵がやってきた。

本当によく土方と居るな。

「あれ？あなたは？」

「あ、どうも。雨宮咲です」

「私は真選組の白瀬葵です」

「よろしく」

「こちらこそ」

二人は握手した。

「あれ？この二人……意気投合してね？」

土方は二人を眺めていた。

二人はそのまま話し合いながら歩き出した。

「あれ？葵！パトロールは！おい！」

土方は置いてけぼりにされた。

「すっかり遅くなっちゃった」

咲は満月がきれいな夜を歩いていた。

葵と仲良くなり、ずうと夜まで話していた。

「綺麗だな」

咲は満月を見ながら歩いていた。

「その水色髪の女止まって下さい」

咲は言われて止まり、振り返った。

そこには、服装はほぼ黒色で染まっており、腰には鐔はなく、柄と鞘が黒色の刀を挿した女が居た。

肌は白かった。

「何？」

「“冷血の鬼姫”とお見受けします」

ピクッ。

咲はその言葉に反応した。

「何でそれを知っているの？」

「すみません。紹介が遅れました。僕の名前は影野 陰子いんこです」
女は挨拶をした。

「私は何で知ってるのって聞いているの」

「鬼兵隊と言えはわかりますか？」

「鬼兵隊！」

咲は顔を陰しくした。

高杉が率いる鬼兵隊。

咲も銀時を探している時に一度高杉と会い、勧誘された。

だが、咲はそれを断った。

「高杉さんから聞いたの？」

「はい。僕はあなたを勧誘しに来ました」

「前も言った通り行かないよ。私は銀兄さんと共にあり続ける。私は大事な物を護る為に戦う。ただ破壊を楽しむあなた達にはついて行かない」

「そうですか……なら」

陰子は鞘から刀を抜いた。

刀身は黒に……いや、漆黒の色だった。

咲は木刀を腰から抜き、構えた。

「殺します」

陰子は咲に向かって走ってきた。

咲も陰子に向かって走り出した。

「ハア！」

咲は木刀を横薙ぎに振った。

咲の木刀は陰子に当たった……様に見えたが、それは幻影の様にゆらつと消えた。

「……！」

「僕には異名がありませんね……“漆黒の狗”と言う異名が」

咲は後ろから声が聞こえて振り返った。

そこには刀を振り下ろそうとしている陰子が居た。

「異名の意味はその名の通り……月夜の闇に紛れる事……からです！」

陰子はそう言った途端刀を振り下ろした。

咲はそれを咄嗟に木刀で受け流した。

「……速いですね。あなたの剣は静剣ですか」

（私の剣が読まれた！）

咲はあれだけで自分の剣を読んだ事に驚いた。

「行くよ！ハアアアアアア！」

咲は連続で突きを放った。

「そんな物……何！？」

陰子は驚いた。

何故なら一つの木刀で放っている連続の突きが、咲の周りに五、六

本あるのだ。

「ちっ！」

陰子は一生懸命防御をするが。
（わからない！どれから放ってきているのかわからない！これは速すぎる！）

咲の木刀を防がないでいた。

防げたとしても数十回だけだ。

「フィニッシュ！」

咲は思いつきり突きを放った。

ドココココココ！

素早く連続で突きを放った。

その為、咲の周りにあった木刀も一斉発射した様に見えた。
それがすべて陰子に命中した。

「くう、やりますね。なら！」

また咲の目の前から姿を消した。

「後ろ！」

咲は素早く後ろを見た。

だが、居なかった。

「絶対の死角である後ろからだけじゃありませんよ？」

咲の右側から声が聞こえた。

「喰らえ！」

陰子は刀を思いつきり右斜めに振り上げた。

咲はそれを咄嗟に交わした。

だが……。

プシュツ。

頬に切れ目が入った。

「そこまでバカじゃないよ」

陰子は言った。

「それに刀が黒いのは僕と一緒に闇に隠れる為だけじゃない」
陰子は素早く咲の目の前に移動した。

そして、横薙ぎに刀を振った。

「くっ！」

咲はそれを防ごうとした。

「！！！」

咲は驚いた。

何故なら刀が見えない。

腕ごと何処かに行った様に。

「下だよ」

パツと下を向くと、刀を振り上げてきた。

咲はそれを後ろに飛んで咄嗟に避けた。

（姿だけじゃなく、刀まで……これは厄介かも）

陰子は咲との間合いを詰めて、連続で刀を振ってきた。

それを咄嗟に木刀で防ぐ。

だが、見えない攻撃のせいで腕や足、顔に切れ目が入る。

「くうう！」

「ハア！」

咲は思いつき蹴飛ばされた。

「ぶっ！」

咲はそのまま地面を転がった。

「そんなもののなのか？ “冷血の鬼姫”？」

咲は立ち上がった。

「！！そだよ。その顔だよ」

陰子は何かを嬉しがっていた。

咲の表情は無表情であり、鬼の様な鋭い目線を陰子にぶつけていた。

咲は本気を出さなきゃ勝てないと踏んだのだ。

「来い！ “冷血の鬼姫”！」

陰子がそう言うと咲は木刀を構えて走り出した。

第四訓　漆黒の狗　（後書き）

ナナフシ「続きは次回です！」

咲「居たアアアア！」

ナナフシ「げっ！見つかった。早く逃げなきゃ……」
「……ってあれ？源外さん？」

すでに源外の姿はなかった。

ナナフシ「あいつ一人で逃げやがったアアアアア！」

咲「死ねえええええええ！」

ナナフシ「ぎゃあああああああ！」

ナナフシは咲にボコ殴りにされ始めた。

銀時「たくつ、葵、次回予告を頼む」

葵「はい旦那。咲、“冷血の鬼姫”目覚める！“漆黒の狗”と恐れられる陰子に勝てるのか！？次回“第五訓”冷血の鬼姫の実力です！」

銀時「それではさようなら」

ナナフシ「助けてよオオオオオオオオ！ アアアアアアア！」

第五訓 冷血の鬼姫の實力（前書き）

ナナフシ「連続投稿！」

銀時「うわっ！ナナフシ！てか、体中ボロボロ！」

ナナフシ「気にするな！僕は読者の為ならばやってやるさ！たとえば死ぬ危険があつたとしても！」

銀時「お前は自殺希望でもあるのか！？」

ナナフシ「でも……」

銀時「でも？」

ナナフシ「一人だけ逃げた源外を許さん！行くぞ銀さん！」

銀時「え？なんでお」後でチヨコレートパフェを奢ってやる！」
よっしゃ！」

ナナフシ「行くぞオオオオオオ！」

銀時「オオオオオオオ！」

葵「あ、行っちゃった。それではどうぞ！」

第五訓　冷血の鬼姫の実力

「来い！“冷血の鬼姫”！」

咲は陰子に向かって木刀を横薙ぎに振った。

（速い！）

陰子は咲の剣を見て、そう思った。

「だけど、そんな単純な攻撃」

陰子は咲の木刀を防ごうとした。

ガンッ！

鈍い音が聞こえた。

「ぶっ！し、下からだと！」

陰子の顎に木刀が直撃したのだ。

「ど、どうなっている！今さっき確かに横薙ぎに！」

「私はね……高速で剣を横薙ぎから振り上げに変えたんだよ。つまりさっきのは、高速で振って生み出された幻影」

「つまり要領はあの突きと同じか」

陰子はニヤリと笑うと走り出した。

「なら、攻撃させなかったら良いこと！」

また消える刀で咲に襲いかかった。

咲はそれを受け流したり、防ぎ始める。

「ハア！」

陰子は突きを放った。

グサッ。

それが膝に刺さった。

「これでもう……ぶっ！」

陰子は宙を舞った。

そして体勢を立て直して着陸した。

咲が木刀を振り上げた後の格好で居た。

「油断しました……だけどこれでもう通常のスピードは出せない」

陰子は勝利を確信した。

だが、咲は立ち上がり、陰子の前まで距離を詰めた。

（ス、スピードが変わってない！）

陰子は驚いていた。

我慢して動かしたのか？と思ったが更に驚いた。

咲の顔は無表情のまままで全然痛がつている様子はなかった。

無言のまま咲は陰子に木刀で打撃のラッシュを始めた。

「ぶっ、がつ、ごっ、ぐっ！」

陰子はダメージを喰らっている。

防ごうとするが……。

（右！いや、違う下からだ！左！違う上から！）

何度防ごうとしても、舞いの様な剣を防げないでいた。

「ハア！」

ドコオ！

咲は陰子の顔面を思いっきり木刀で叩いた。

「ぶっ！」

陰子は怯み、後ろに下がった。

（これが“冷血の鬼姫”の力！これで“白夜叉”には敵わないって

……“白夜叉”はどれだけ化け物なんだ！）

陰子はその事を考えると“白夜叉”に恐怖した。

「これで終わり？」

「いや、まだ！僕はあなを「やめろ」し、晋助！」

「高杉さん」

咲は高杉に敵意を向きだしにした。

「そんなに敵意を向きだしにするなよ咲」

「何か用ですか？」

「いや、もうお前の勧誘は諦める。俺たちの敵に回るんだな咲？」

高杉は笑った顔で聞いた。

「ええ、銀兄さん、ヅラさんと一緒にあなたを斬る！」

「ククク、そうかよ。さ、高杉イイイイイ！」銀時か」

銀時が咲の後ろの道からやってきた。

「咲大丈夫か!？」

「うん」

咲の表情は元に戻った。

その途端、膝を抑えた。

「お前膝が!」

「大丈夫だよ」

咲は笑って見せた。

「ちっ、今すぐに病院に連れて行ってやる!高杉!」

「あっ?」

「今回は見逃してやる!次会うときはぶった斬る!」

銀時は咲を背負って、走って去っていった。

「ぶった斬る……ね」

高杉は“ククク”と笑った。

「晋助……」

「行くぞ陰子」

「うん」

高杉と陰子は闇夜に消えた。

第五訓 冷血の鬼姫の實力（後書き）

ナナフシ「源外イイイイイイ！見つけたアアアア！」

源外「ナナフシじゃねえか」

ナナフシ「覚悟オオオオオオ！」

ナナフシは木刀を振った。

源外「おっと、危ねえじゃねえか」

銀時「喰らえジジイ！」

源外「銀の字まで！？」

銀時「俺がチヨコレートパフェを奢ってもらう為に犠牲になれえええええ！」

源外「チヨコレートパフェの為かよ！」

ナナフシと銀時は源外の左右に立った。

ナナフシ・銀時「オラア！」

源外「そうは行くか！」

ビリビリ！

ナナフシ・銀時「ぎやあああああ！」
ドサッ。

二人は電撃を喰らい、その場に倒れ込んだ。

源外「ふん、甘いわ！おm「見つけた」へ？」

咲が源外をに睨んでいた。

咲「死ねえええええええええ！」

源外「ぎやあああああああ！」

源外の叫び声が響いた。

葵「……次回は“陰子のキャラ紹介”です」

ナナフシ「あ……後これも」

ナナフシは葵に紙を渡した。

葵「何々、『銀魂 冷血の鬼姫の日常 番外編 咲と銀時、松陽との出会い』もよろしく。短編小説です……って、これ宣伝！？」

ナナフシ「……………」

葵「あ、気絶してる。それではまた次回」

陰子のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「ちゃっちゃと出せばよかった」

陰子「ククク、僕のキャラプロフィールね」

ナナフシ「陰子!？」

咲「陰子何しにきたの!」

陰子「今回だけだよ。それじゃ、どうぞ」

陰子のキャラ紹介

名前 影野 陰子

年齢 20歳 誕生日 9月17日

好き 高杉、後はない

嫌い 咲、銀時、桂、辰馬（って言うか戦う相手として楽しんでい
る）真選組、幕府

実は幕府に所属していた武士。

その月夜に隠れる事から“漆黒の狗”と恐れられた。

だが、幕府の事を嫌っており、反発的に動いていた。

そこを高杉に拾われた。

高杉の事が好きである。

銀時、咲、桂、辰馬を狙っている（辰馬は少ないだろうけどね）。

ナナフシ「僕は思った」

銀時「何だ？」

ナナフシ「なんか、銀さんには咲、土方さんには葵、高杉には陰子
となんかこうなってるねって」

銀時「咲が何で俺？」

ナナフシ「え？いや、咲が銀さんの事が好きだなんて……あ！」

銀時「咲が俺の事を……」

ガンッ！

銀時「ゴファ！」

銀時はその場に倒れた。

後ろには木槌を持った咲が立っていた。

咲「ナナフシ！」

ナナフシ「はい！」

咲「あれ……どうしてくれるの？」

ナナフシ「源外さん！カモン！」

源外「はいはい、この機械で記憶操作ができるぞ」

咲はそれを使い、自分が銀時の事が好きってバレた部分を消した。

咲「今度から気をつけてね？」

ナナフシ「はい！」

銀時「ん？俺はいつたい？何か忘れてる様な」

咲は銀時が起きたと同時に木槌を捨て、何もなかった様な顔をしている。

ナナフシ「銀さん、眠っちゃダメですよ」

銀時「あ？寝ちまったのか」

ナナフシ（銀さんがバカでよかった）

咲「それでは終わりです」

陰子のキャラ紹介（後書き）

ナナフシ「やふうう！番外編小説2の攘夷戦争を書いたぜえ！」

銀時「そうか」

ナナフシ「反応薄っ！」

咲「思い出したくない記憶だから」

ナナフシ「あ、ごめん」

銀時・咲「……」

ナナフシ「今回はここまで！それでは次回に会いましょう！」

第六訓く迅雷く（前書き）

ナナフシ「今回もオリキャラ出します」

銀時「思いつくの速えな」

ナナフシ「今回は銀さんが活躍します」

銀時「マジでか！」

ナナフシ「はい」

銀時「よっしゃアアアアア！」

咲「ナナフシ、私は？」

ナナフシ「活躍しません。前回させたから」

咲「そう」

ナナフシ「やっぱ、銀さんとは違うな」

銀時「うるせえ！それじゃあ始まるぜ！」

第六訓く迅雷く

銀時はファミレスにおり、一人でチョコレートパフェを食べていた。
てか、虚し！

「うるせえ！作者！」

悪かったな！

え？他の万事屋メンバーは？

新八はお通のライブ。

神楽は定春の散歩。

咲はそれについていった。

と言う事で銀時は一人である。

銀時はパフェを食い終わると、店を出てある事を思い出した。

「ヤベツ、今日ジャンプの発売日じゃん」

銀時はコンビニに向かって歩き出した。

「あ、発見ジャンプ！最後の一冊！」

銀時がジャンプに手を伸ばすと別の手が入ってきた。

「ん？」

二人は見合った。

そして、二人は驚いた顔をしていた。

「ら……雷雅か？」

「銀の兄貴か？」

二人はそう言い合った。

「久しぶりだな」

「そうだな……攘夷戦争ぶりか？」

二人は歩きながらそう話していた。

雷雅とは攘夷戦争で知り合った仲である。

「そうか……咲の姉御も居るのか」

「おう……てか、いい加減俺を銀の兄貴なんて呼び方やめてくんない？」

「何でだ銀の兄貴！俺はあんたを尊敬しているんだ！」

「だからってよ、本当にやめてくれない？」

「やめん！」

雷雅は断言した。

話していると銀時はある事を思い出した。

「あ！ジャンプ買うの忘れた！」

銀時はそれに気付いたのだ。

「すまねえ雷雅！また会えたら会おうや！」

「ああ」

銀時は走っていった。

「すぐ会えるさ。銀の兄貴」

雷雅はニヤリと笑った。

銀時は色んな所を回ったが、ジャンプは買えなかった。
色んな所を回ったせいで、夜である。

「ちくしょう！ジャンプ見当たらなかった！」

銀時は橋を渡ろうとした時だった。

目の前に包帯で顔を隠した男が立っていた。

手には薙刀を持っている。

「あ？誰だデメエ？」

「俺は辻斬りだ。あなたは“白夜叉”だな？」

ピクッ。

銀時はその言葉に反応した。

「何で知ってやがる？高杉とこの奴か？」

「高杉？知らないそんな奴」

（高杉んとこの奴じゃないなら攘夷戦争に参加していた奴か？いや、嘘をついている可能性も）

銀時は悩んだ。

「さっそく行かせてもらおうか」

包帯の男は地面を強く蹴った。

「！！」

銀時は驚いた。

目の前からその男が消えたのだ。

銀時は後ろから殺気を感じ、振り返った。

そこには薙刀を振り上げていて、今まさに振り下ろそうとしていた。

「喰らえ！」

「ちっ！」

銀時は素早く抜刀して防いだ。

そいつは後ろに飛んだ。

「さすが“白夜叉”」

「テメエ！顔を隠してないで見せろや！」

銀時はそいつに怒鳴った。

「しょうがないな」

そいつは包帯を取り始めた。

銀時は違和感を感じていた。

あの戦い方、声、武器。

何かと自分が知っている人物に当てはまる。

（ま、まさかな）

銀時は考えが外れてほしいと願った。

だが、それは叶わなかった。

「やあ、銀の兄貴」

包帯の男の正体は雷雅だった。

「やっぱりテメエだったか」

銀時は雷雅を睨んだ。

「テメエ……何で辻斬りなんかしている？」

「強者を求めて……かな」

雷雅がそう言うとな一人の男の姿が思い浮かんだ。

神威

神楽の兄であり、宇宙海賊春雨の第七師団団長

神威は強者だけを求める夜鬼。

銀時も狙われている。

「そうか……テメエも変わっちまったな」

銀時はそう言った。

「だが、手加減はしねえ。昔の仲間だろが何だろうがたたつ斬る！」

銀時は木刀を構えながら言った。

「ククク、殺ろうか……銀の兄貴……いや、“白夜叉”！」

雷雅は走り出した。

銀時も走り出した。

「オラァ！」

雷雅は薙刀を横薙ぎに振った。

ガキイイイン！

銀時はそれを木刀で防いだ。

「甘いね銀の兄貴……僕の異名を知ってるでしょ……“迅雷”を」

雷雅が地面を強く蹴ると、目の前から姿を消した。

「ちっ！何処行った！」

銀時は辺りを見回した。

「上だよ」

雷雅の声が聞こえ、上を向くと……薙刀で刺そうとしている雷雅が

居た。

そして、突きを放った。

銀時はそれを横に交わし、素早く蹴りを入れた。

雷雅は蹴り飛ばされ、地面を転がった。

「ククク……面白いよ銀の兄貴！」

雷雅は銀時の前まで移動した。

「本気で行かなきゃこつちがやられるからね」

すると、銀時の目の前から消えた。

その途端、体に切れ目が入る。

「ちっ！出やがった！」

雷雅は実は高速で移動して、銀時を攻撃しているのだ。

スピードは忍者に近い。

「ぐっ！」

銀時の体にドンドン切れ目が入る。

そして銀時は何かを見つけた様に……。

「ここだア！」

横薙ぎに木刀を振った。

「ぶっ！」

雷雅にそれが直撃し、吹き飛ばされた。

雷雅は立ち上がると笑った顔で居た。

「さすが銀の兄貴だ。先読みをしてそこに木刀を振ったか」

雷雅は不気味な笑いを浮かべる。

「次はこつちからだ！」

銀時は雷雅に攻撃を仕始める。

（ちっ！銀の兄貴の剣は読めねえ！）

銀時の我流に雷雅は追い込まれていた。

「オラア！」

雷雅の顔面に木刀が直撃した。

「ガハア！」

雷雅は吹き飛び、壁に直撃した。

銀時は雷雅に近づいた。

「俺の勝ちだな？」

「ふっ、それはどうかな？」

グサッ！

刺された音が聞こえた。

銀時が左足を見ると薙刀が刺さっていた。

「んがあああ！」

銀時は歯を食いしばる。

銀時の足から薙刀を抜くと……。

「今回は帰るわ。じゃあな銀の兄貴。後本当に杉の兄貴とは何も関係ねえよ」

それを言うところからふらした足取りで逃げ出した。

「ま、待ちやがれ！」

銀時は左足を引きずりながら追いかけた。

だが、見失ってしまった。

（雷雅…… テメエまで高杉の様に変わっちまったのかよ）

銀時はそう思った。

余談だが、帰った後、咲達に何があったか聞かれたが、「転けた」とか適当な事をぬかしてスルーした。

第六訓　迅雷（後書き）

ナナフシ「オリキャラが出てきました！銀さんも少し苦戦しましたね」

銀時「うるせえ！」

ナナフシ「あんた今回『うるせえ！』が多いですね」

銀時「悪かったな」

咲「あはは……思えばナナフシ、読者に言う事があるんでしょ？」

ナナフシ「あ！そうです！何か僕も『教えて！銀八先生！』が急にやりたくなつたんです」

咲「突然だね！」

ナナフシ「やると言っても質問が来なきゃ意味がないんだけどね」

銀時「それに特に疑問に思う事もない！と思うものばっかだと思ってるんだろ？」

ナナフシ「はい……でも！一様募集はしておきます！」

咲「全然来なかったら？」

ナナフシ「その時はその時と言う事で！」

銀時・咲「『樂觀的！』」

葵「しょうがないよ。旦那、咲ちゃん、それがナナフシだもん」

ナナフシ「質問がくれば、おまけか後書きに書きたいと思います！」
葵「それではさようなら！」

雷雅のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「さっさとキャラ紹介を出す！」

銀時「そうか」

雷雅「俺のだな」

銀時「雷雅……」

雷雅「銀の兄貴、心配しないでくれ。今回だけだ前書きに出るのは」

銀時「そうか」

雷雅「それじゃ、どうぞ」

雷雅のキャラ紹介

名前 疾風 雷雅 はやて らいが
年齢 21歳 誕生日 4月9日
好き 辛い物
嫌い 苦い物
髪 茶色
瞳 黒色

雷雅は攘夷戦争に参加した経験がある。

攘夷戦争では天人から“迅雷”と恐れられていた。

動きは忍者並みのスピードである。

得物は薙刀を使う。

銀時達の前に辻斬りとして現れる。

銀時を「銀の兄貴」、咲を「咲の姉御」、高杉を「杉の兄貴」、桂の事を「ヅラの兄貴」、辰馬の事を「辰の兄貴」と呼んでいる。

ナナフシ「こんなもんですね」

咲「まさか雷雅さんまで変わるなんて」

銀時「しょうがねえよ。世の中何が起きるかわからねえ」

咲「うん……」

ナナフシ「二人共！そんなしんみりにならないで！」

銀時・咲「……………」

ナナフシ「それでは！」

雷雅のキャラ紹介（後書き）

ナナフシ「さつさと次回も考えよ！」

銀時「張り切ってるな」

ナナフシ「おうよ！書くのが面白くてたまらないんだよ」

銀時「そうか」

ナナフシ「それでは次回会いましょう！」

第七訓「これ……なんですか？by咲」（前書き）

ナナフシ「今回はたぶんギャグ！」

銀時「たぶんかよ！」

ナナフシ「お妙が出てきます！出さなかったらあの人に殺されますし」

銀時「だろっな」

咲「お妙さんはどんな人だろう」

銀時「期待しない方がいいぞ」

咲「え？何で？」

銀時「ま、始まるぜ！」

第七訓　これ……なんですか？by咲

今、銀時達万事屋メンバーは新八の家に居た。

銀時、新八、神楽の顔は青ざめていた。

何故なら……。

（おいしいおいしい！新八おいしい！何で暗黒物質ダークマターを食わねえといけねえんだアアア！）

（知りませんよ！咲さんの事を話したら急に、『なら、歓迎会をしましょう！料理に腕をかけるわ』とか言い出したんですよオオオオオオ！）

（新ハイイイ！どうするアルカアアアアアア！）

三人は小声で話し合っていた。

ガラッ。

襖が開いて、女の人が入ってきた。

「銀さん達待たせてごめんなさいね」

お妙が入ってきたのだ。

そして、咲を見る。

「あら、あなたが咲ちゃん？」

「あ、はい、どうも、私は雨宮咲です」

咲はお辞儀した。

「私は志村妙です」

妙もお辞儀をした。

「銀さんの妹にしては出来た子ね」

「悪かったな」

銀時は妙にそう言った。

「歓迎会なんて開いてもらって……よかったですか？」

「良いのよ。私も咲ちゃんを見てみたかったし。それに銀さんじゃ、そんな事出来ないでしょ」

「黙っとけや」

銀時は妙にまた言った。

まあ、金欠なのは間違いないけど。

「作者黙れ！」

悪かつたな！

「それじゃ、料理持ってきますね」

「あ、はい」

咲以外は顔を青くした。

(やばい！来るぞオオオオオオ！)

(ど……どうすれば！)

（私……食べたくないネエエエエ！）

三人はそれぞれ思った。

それを知らない咲は哀れ。

そして、妙は料理を運んできた。

咲はそれを見て顔を青くした。

「あの……これは？」

咲は皿の上に乗っている黒い物体に指を向けた。

「これ？ごめんなさいね。私卵焼きしか焼けないの」

咲はこう思った。

(二) これが卵焼きイイイイイ！これどう見てもかわいそうな卵焼

きだよオオオオオ！
😊

咲は言った。殺されると思った。

“冷血の鬼姫”でも無理か。

「あゝ、妙……なんか卵焼きの他にも色々あるんだが……」

銀時はテーブルに並べられている料理を見て言った。

「色々挑戦してみたの。それはオムレツ、それはスクランブルエツ

グ、それは……」

ドンドン妙は言っていく。

(おいしいおいしい！これ絶対死ぬううううう！)

（姉上ええええええ！僕達を殺す気ですかアアアア！）

(やばいアルうううううううう！)

（これ全部食べなきゃダメなのオオオオオ！）

四人は冷や汗を流した。

「さあ、召し上げれ」

（（（いやだアアアアア！）））

四人の心はシンクロした。

（どうするこの状況を！）

（今回はかりはこれ全部食べる事になると皆死にますよ！）

（こうなれば……新八犠牲になるアル！）

（え！嫌ですよ！）

（お！それ良いな！）

（銀さんまでええええええ！）

（新八さんいじめやめてあげようよオオオオオ！早く解決策考えないとオオオオオ！）

小声で話す四人。

「お……俺腹一杯だから良いわ」

銀時はそう言った。

「嘘ついてんじゃねえぞ」

妙はニツコリ笑ったまま殺気をぶつけた。

「すみませんんんんんんん！」

銀時は土下座した。

銀時は新八の頭を掴み……。

タークマター
暗黒物質に叩きつけた。

「ぐばおおおおおおお！」

新八はジタバタ仕始めた。

だが、すぐにそれが終わった。

引き上げると白目を向き、鼻水と涎を垂らしている新八だった。

（新八！すまん！）

「いや、そう思うならやつちゃダメだよオオオオオオ！」

咲はツツコンだ。

「あらあら、新ちゃんったらあまりのおいしさに気絶したのね」

（（そんな訳あるかアアアアア！））

三人はツツコンだ。

「神楽ちゃん」

「な……何アルカ姉御」

「こつちいらっしやい」

神楽は言われる通り、妙の隣に座った。

「はい、あゝん」

神楽に暗黒物質ダークマターを向ける。

「べ、別に良いアル！自分で食べれるアル！」

「照れちゃって、あゝん」

「良い……むぐっ！」

神楽は無理矢理食べさせられた。

神楽は何も言わず、白目を向き倒れた。

「「ちやアアアアん神楽アアアアアアア！」」

二人は神楽に近づいた。

「おい！神楽！」

「大丈夫！」

「ぎ……銀ちゃん、咲……川が見えるアル」

「ダメだアアア！それ渡ったらダメだアアアア！」

「神楽ちやアアアアアん！」

二人は何とか神楽が川を渡るのを止めた。

「あれ？新八さんの……」

「は？」

銀時が咲に言われて見ると幽体離脱していた。

そして、今にも空へ飛んで行こうとしていた。

「逝くなアアアア！新八iiiiiiii！」

「死んじやうよオオオオオオ！」

何とか魂を体の中に戻した。

「「ハアハア」」

二人は疲れ果てていた。

生徒「銀八先生！」

銀八「はあい、質問が来たので始める事になりました。このコーナー、アシスタントはこの人です」

咲「どうも、雨宮咲です」

銀八「はあい、行くぞペンネーム『黒龍』さんから、『黒龍』おお、またオリキャラ登場ですか」

銀時「この作品、攘夷戦争関係の奴が多く出て来るな」

ソラ「そう言うモンなんだろ」

黒龍「二人にもいますよね。攘夷戦争時の仲間たちが」

銀時「当たり前のこと聞いてんじゃねエ」

ソラ「大半は死んじゃったけどな」

黒龍「雷雅は戦争のせいで戦闘狂になってしまった悲しい存在ですね」

銀時「強さも相当あるみたいだしな」

黒龍「これは、あっちの銀さんもおちおちしてられませんね」

銀時「つつかよお、まさか高杉にもヒロインポジの奴が出来るとは思わなかったな。マヨラーはいらねえけど」

黒龍「あなたあの人がどれだけ嫌いなんですか？ まあ、高杉好きな人はもう一人いますけどね。あの股の人が」

銀時「おい、銃ぶつ放されるぞ？」

黒龍「では、折角なので質問します」

1 咲に質問。銀さんと子作りしたいと思いますか？

2・銀さんに質問。咲とさっちゃんと月詠の三人なら誰を彼女にしますか？

3・新八に質問。今の所まるでモテない現実について何か言う事はありますか？（黒笑）

銀時「おいしいおいしい！！！！何とんでもない質問してんだよ！？」

黒龍「では、次回も楽しみにしています」

銀時「無視すんなアアアアアア！！！」
「はい、質問に答えま
す。まずは一つ目から咲」

咲「え？ええええええ！ぎぎぎぎぎぎ、銀兄さんとここここ子作り
イイイイ！ししししたいです！／＼／＼」

銀八「大声で言ったよこの人！次は二つ目だ。むかつくが銀時」

銀時「それはだな……答えられない」

銀時は冷や汗を流していた。

何故なら咲が刀を鞘から抜いて銀時を睨んでいるのだ。

咲と言えは何されるかわからない。

さっちゃんはないだろうな。

月詠と言えは殺される。

そう言う訳で答えられない。

銀八「すみません。つて言うか何処から刀を！」

咲「秘密です」

銀八「おい！まあ、良いや。最後の質問だが……」

新八「どんちくしょオオオオオ！こんな現実なんかアアアアア！
何で僕はもてないんだアアアア！」

新八は暗黒物質を取り出す。

新八「こんな質問した黒龍と向こうで、もてまくっている銀さんに
発射アアアアア！」

新八は暗黒物質を大量に投げた。

銀八「oooooooooooo！何してんだアアアアア！『黒龍』さん
廊下に立たなくていいから逃げてええええええ！」

咲「質問は以上です」

銀八「質問待ってるぜ！本当に待ってるぞ！」

第七訓　これ……なんですか？by咲（後書き）

ナナフシ「……うう……川が見える……」

葵「ナナフシイイイ！渡っちゃダメええええええ！」

葵はナナフシを止める。

銀時「あ、川が」

咲「私も」

葵「旦那アアア！咲ちゃアアアアアん！」

葵は二人も止めた。

葵「つ……疲れた……それではまた次回！」

ナナフシ「感想をくださああああい！」バタツ。

葵「言う事言って倒れた！質問も真面目じゃなくても良いですよ」

第八訓　毒牙の大蛇と猛獣の牙（前書き）

ナナフシ「オリキャラ思いついたぜ！」

銀時「またかよ！」

ナナフシ「でないとこの小説は進まない！わかるだろ！」

銀時「そ、それもそうだが」

ナナフシ「それでは」

咲「どうぞ！」

ナナフシ「俺が言う筈だったのにiiiiiiii！」

第八訓　毒牙の大蛇と猛獣の牙

銀時と咲は珍しく二人で町を歩いていた。

他はつて？休みだから自由行動だよ。

銀時と咲は別の人から見ると恋人同士に見える。

銀時は彼女が居ない男共からの目線をジンジン喰らっていた。

（何だ？何でこんなに睨まれているんだ？）

銀時は義妹と歩いていると言う自覚しかなかった。

咲は嬉しがってるけど。

銀時と咲は話しながら歩いていた。

パフェ食ったり、服屋行ったり、もはやデートに近かった。

いや、デートじゃね！？

「あれ？旦那じゃないですかい」

銀時に喋りかけたのは沖田だった。

「総一郎君か」

「総悟です」

沖田は間違いにツツコンだ。

「旦那、それが土方さんや隊士達が言っていた咲ですかい？」

「ああ」

銀時は短めに答えた。

「咲ちゃん！」

「あ、葵ちゃん！」

葵が沖田の後ろから来た。

「あ？誰だ？」

「あ、どうも、私は真選組の白瀬葵です」

葵は銀時に挨拶をした。

「真選組って野郎しか居ないあそこにか！」

「え？はい」

「毎日大変じゃねえか？」

「え？まあ、でも慣れました」

「そうか……俺は坂田銀時だ」

「あ、沖田さんや土方さんがよく言っている」

「旦那、俺を忘れてませんか？」

沖田は銀時に聞いた。

「忘れてねえって」

「そうですかい」

「私も旦那って呼ばせてもらいます」

「勝手にしな」

銀時は適当に流した。

「確か咲は旦那の義妹でしたねえ」

「ああ」

「本当に旦那の義妹ですかい？よく出来た子ですぜい」

「よく言われるわ！」

銀時は沖田に怒鳴った。

「それじゃ、私達はパトロールの途中なので」

「旦那、気を付けてください。最近辻斬りが出てますぜえ」

銀時はその言葉に反応した。

雷雅じゃないのか……と。

沖田と葵は去っていった。

「辻斬りか……恐いね銀兄さん……銀兄さん？」

咲は銀時に訪ねた。

「あ、ああ」

銀時は悩んでいた。

人が少ない所まで来た。

「その銀髪の男と水色の髪をした女、止まれ」

二人はピタッと止まった。

振り返ると、男と女が居た。

男の腰には刀が二本。

女には一本挿していた。

「誰だ？ テメエ等」

「ご存じでしょ？ 私達は辻斬りよ」

「辻斬り？ まさか出会いしちまうとはな」

銀時は頭を掻きながら言った。

「お前等に勝負を申し込む」

「辻斬りにしては礼儀が良いね」

咲は木刀を腰から抜き、構えた。

銀時も構えた。

（雷雅じゃなかったか）

銀時はそう思った。

「名前ぐらい教えるよコラ」

「すまん。俺は獣牙 もうとう 猛刀だ」

「私は蛇眼 どくこ 毒仔」

「俺は坂田銀時」

「私は雨宮咲」

それぞれ名乗った。

「と、まあ辻斬りにしては本当に礼儀が良いな」

「気にするな……始めようか」

猛刀と毒仔も刀を抜いた。

「行くぜ！」

四人は同時に走り出した。

「てえやあ！」

銀時が木刀を横薙ぎに振る。

二人はそれを交わす。

「ハアアアア！」

咲はすかさず猛刀に連続の突きをする。

「ぐっ！」

猛刀はそれで吹き飛ばされる。

「私も居るわよ？」

毒仔が横から咲を斬ろうとする。

ガキイイイイン！

銀時がすかさず間に入り、それを木刀で防ぐ。

「やるな。この二人」

「そうね。猛刀」

二人はニヤリと笑った。

「戦闘狂が」

銀時は呟いた。

「銀髪！」

銀時は猛刀の声に反応してみる。

すると、目の前まで猛刀が来ていた。

「喰らえ！」

猛刀は左手の刀で突きを放つ。

「ちっ！」

銀時は回転してそれを避ける。

その勢いのまま猛刀の顔面に木刀を叩きつけようとする。

ガキイイン！

それを毒仔の刀で防がれた。

素早く咲が毒仔を蹴り飛ばそうとする。

ドカァ！

「ぶっ！」

咲が猛刀に蹴り飛ばされた。

「咲！」

銀時は叫んだ。

「よそ見している暇はないわよ！」

毒仔を見ると刀を振り下ろしてきた。

銀時はそれを後ろに飛んで避ける。
シュパッ。

顔に切れ目が入る。

「ちっ！」

銀時は二人を睨む。

「行くぞ！」

銀時は連続で木刀を振る。

二人は防ぐ。

だが……ドカア！

二人は直撃して吹き飛ばされる。

「あの男の剣……型が変わりやがる」

「厄介だね」

二人は銀時を見てそう言った。

「それにあの女も本気じゃないな」

「二人共結構の実力者ね」

次は咲を見てそう言った。

「オラ！まだ行く……ぞ？」

銀時の視界がグラッとなった。

「やっと効いてきたわね」

「な……何をした」

銀時は毒仔に訪ねた。

「私の刀には毒があるの。あ、痺れ毒だから安心して」

銀時はその場に座り込む。

「か、体が動かねえ」

「私の異名は“毒牙の大蛇”だよ」

「俺は“猛獣の牙”だ」

「異名があつたの！？」

咲は驚いた。

なら元々は何処かの組織に属していたものに違いない。

「それじゃあね。お兄さん」

毒仔は銀時の前に立ち、刀を振り下ろした。

（ここまでか！）

銀時は目を瞑った。

ガキイン！

何かがぶつかり合う音が聞こえて目を開けると……薙刀が自分の目の前に割って入っていた。

「おい、銀の兄貴と咲の姉御は俺の獲物だ」

声がした方向を見ると雷雅が居た。

「雷雅（さん）！」

咲は雷雅がこの町に居た事に驚いた。

「やあ、咲の姉御」

雷雅はニヤリと笑った。

ピクッ。

咲は高杉とはまた違うものを雷雅から感じて雷雅を警戒した。

「ククク、銀の兄貴と咲の姉御は俺の獲物だぜ？何してくれるんだ？しかも女……小賢しい方法使いやがって」

猛刀と毒仔を睨む。

二人も感じた。

この男は危険だと。

雷雅は猛刀と毒仔に近づいた。

「わかってんだろうな？」

「はい！」

猛刀と毒仔は逆らえなかった。

「雷雅デメエ……」

「心配するな銀の兄貴。俺は弱ってる奴を殺ろうとは思わねえ」

雷雅は去っていきこうとする。

「万全の状態の時にまた相手を頼むよ」

雷雅は去っていく。

「ちっ！今回は見逃してやる！ありがたく思え！」

「行くよ」

猛刀と毒仔も去っていった。

「銀兄さん！」

咲は銀時に近づく。

「体が動かねえや。肩を貸してくれ」

咲は銀時を担ぎ、万事屋に戻った。

～おまけ～

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「はい、始めました教えて銀八先生」

咲「アシスタントの咲です」

銀八「それじゃ行くぞペンネーム『黒龍』さんからの質問『黒龍』阿賀のぐあえぐおあがえw gのわほぅつががsがおgはえw gはw hごhわおいg hああああああああああああ！！！！」

銀時「作者アアアアアアアア！！！！」

ソラ「死んだか？」

神楽「あ、アネゴの暗黒物質^{ダークマター}はやっぱり凄いネ……」

新八「ふん！ あっちの僕を馬鹿にするからだ！」

銀時「……なんか新八がいつも新八じゃないんだけど？」

アリス「いつも扱いを悪くさせているからだろうな」

ソラ「ん？ 黒龍が起きたぞ」

黒龍「しん……ぱち……す……」

新八「えっ？」

黒龍「……新八……ろす……」

新八「いや、だから何て？」

黒龍「新八殺すウウウウウウウウウ！……！」

新八「ぐぎゃあああああああああああああああああ……！」

銀時「黒龍のアップーカットが炸裂した！？」

セイバー「新八が星に……！」

神楽「アレを見るアル！ 新八が夜空に輝く星になってるネ……！」

新八「僕……目立つ事が、できたかな……？」

銀時「なんか願いシヨボ!？」

黒龍「では、質問です!」

1・新八に質問じゃあああああああ!! 貴様良くも俺にあんな物食わしてくれたなアアアアア!! ならこつちはお前にフェイトの物体Xを発射じゃアアアアアアアアア!!

2・咲と銀さんと神楽は災難だったね? 栄養ドリンク送るから元気出してください。

3・神楽に質問。神威が優しいお兄ちゃんと言うシーンを想像してみてください。

銀時「oooooooooooo!!?? 1は最早ただの復讐じゃねえーか!!」

セイバー「完全にブチギレているようですね……」

黒龍「では、次回も楽しみにしています」『とてもいいいいいい!! 新八に物体Xが行ったぞオオオオオ!!』

新八「うがおじよてやおtjごあうyとあおうたおいjたうちあおいたついとじゃおgじゃいjgひおあg@ぱこいさおいああああああああ!!」
ドサッ。

新八に物体Xが直撃して倒れる。

銀八「新八iiiiiiii！次の質問に行くか」

咲「切り替え早っ！」

銀八「二つ目の質問だが」

銀時・咲・神楽「……ありがとう！黒龍（さん）」

銀八「さっそく飲んだ様です。最後の質問だが神楽」

神楽「優しい兄貴アル力……」

神楽は想像仕始める。

~~~~~  
神威「神楽、おいで」

神楽「兄貴！」

神楽は神威に甘える。

神威「神楽、誰にいじめられたんだ？」

神楽「兄貴……」

~~~~~

神楽「こんな感じアルかな」

神楽はその後、幸せな家族を想像した。

銀八「神楽……本当に想像通りになるかはわからんぞ」

第八訓　毒牙の大蛇と猛獣の牙（後書き）

ナナフシ「新八がアアアアア！」

銀時「そんなにやばいのかよ！」

咲「恐いよオオオオオ！」

新八「ナナ……でだ」

ナナフシ「はい？」

新八「ナナフシイイイイ！何で僕の事が好きなオリキャラを作らないんだアアアアア！」

ナナフシ「お前には必要ない！って言う奴が多そうだから」

新八「なんだとおおおおおお！」

新八は木刀でナナフシに襲いかかる。

ナナフシ「無駄だアアア！」

ナナフシはバズー力を構えて新八にぶつ放す。

新八「ぎゃあああああ！」

新八は黒こげになり、倒れる。

ナナフシ「僕、射撃は得意ですから」

銀時「いや、それは当たる範囲でかいだろオオオオオ！」

ナナフシ「それではまた」

銀時「無視するなあああああ！」

猛刀と毒仔のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「やる事なかったなので投稿」

銀時「どんだけ暇なんだ！」

ナナフシ「まあ、気にしないでください」

咲「今回はキャラ紹介だね？」

ナナフシ「はい、銀八先生もやろうかなあって」

銀時「そうかよ。それじゃ始めるぜ」

猛刀と毒仔のキャラ紹介

名前 獣牙 猛刀

年齢 21歳 誕生日3月29日

好き 毒仔、変わった物

嫌い 雷雅

髪 黒色

瞳 黄色

毒仔とは恋人同士の仲。

辻斬りをしており、真選組に指名手配されている。

何処かの組織に居たらしく“猛獣の牙”と言う異名がある。

剣はあまり戦闘で出してなかったため、紹介するが、そのままの意味であり、牙の様に突き立てようとする。

つまり突きを中心とした剣である。

名前 蛇眼 毒仔

年齢 21歳 誕生日2月26日

好き 猛刀、芸術

嫌い 雷雅

髪 茶色

瞳 赤色

猛刀とは恋人同士の仲。

猛刀と同じ様に辻斬りをしている。

どうやら猛刀と同じ組織に居たらしく“毒牙の大蛇”と言う異名がある。

毒で動けなくしてから殺す。
ほぼ毒蛇に近い行動である。

ナナフシ「ふう、これでどうだ」

銀時「って言うかあの二人恋人同士だったのか！」
ナナフシ「はい」

咲「オリキャラ同士がくっついたやつが出たよ」

銀時「たくつ、次は質問コーナーだぜ」

ナナフシ「やつと、黒龍さん以外にも質問が来た」

銀時「よかったな」

ナナフシ「それではまた次回！」

くおまけく

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「はあい、質問に答えるぞコノヤロー」

咲「アシスタントの咲です」

銀八「たまには他の奴呼べよ。たくつ、ペンネーム『蘿蔔』さんか

らの質問『「新八に惚れる女なんていませんよ」
んでもって出番消えちゃえ」

「ヤッホー

悠宇ちゃんです

しつもん

神威が銀さんに殺されたら

阿武兎と神楽ちゃんはどう思うの？」

「阿武兎のぶの字違う…」

「悠宇」

アンタまだそのしゃべり方抜けてなかったんですね」

「由利ちゃん

見逃してよ」

雷雅は皆に何で戦う意味を聞かなかったの？
何かが変わってたかもしれないのに…

「悠宇」

待て～！」

「アハハハハ

怖いなあ由利ちゃん」

面白かったです

頑張ってください！』まったくその通りです！新八に惚れる女なんて居ないんだよ（黒笑）」

咲「酷っ！」

銀八「まずは一つ目ですが……」

神楽「銀ちゃんもその時はしょうがないね。あのバカ兄貴が悪い時もアルネ……でも、本当に殺されたら……どうなるかわからないアル」

銀八「神楽……」

阿伏兔「ウチの団長がそう簡単にやられる訳がないだろ。殺された時は殺された時だ。戦場では敵討ちなんて思うもんじゃないぜ」

銀八「こっちは恐い。二つ目だが」

雷雅「ククク、その時には俺は答えを見つけてたんだ。聞く必要なんてないだろ？俺は強者を求める為だけに生きるんだよククク」

銀八「でも、聞いてたら変わってたかもな」

もし、雷雅が銀時達に相談していたら、銀時、桂、辰馬の元に居たんじゃないかと想像する銀八。

銀八「と言う事で、『蘿蔔』さん廊下に立ってなさい。次はペンネーム『黒龍』さんからの質問だ

『黒龍』まさかまたオリキャラ登場とは……」

銀時「まあ、雷雅よりは弱そうだけだな」

新八「つつかあっちの僕ウウウウウ！！？？」

黒龍「ただ俺は思った事があります」

ソラ「何をだ？」

黒龍「毒仔の毒よりお妙の暗黒物質ダークマターやフェイトの物体Xの方がずっと危険だと言っ事に」

新八「た、確かに」

黒龍「毒勝負したお妙さんに勝てる人いないんじゃないでしょうか？」

神楽「あ……アネゴアル」

黒龍「あふん」

新八「作者死んだアアアアアアア！！？？」

黒龍「しかし復活！！」

銀時「復活早！？」

セイバー「あなたはゴキブリですか？」

アリス「ゴキブリ以上の生命力だな」

黒龍「えー……（；、）そう言う反応……」

銀時「あ、落ち込んだ」

黒龍「……と、とりあえず質問いきます」

1・新八に質問。お前アイドルオタク&オタクだからたぶん彼女で
きないんじゃない？

2・そっちの万事屋メンバーに質問。こっちの新八を見てどう思
いますか？

3・咲に質問。こっちの小説で一番最悪だと思う奴とかいますか？

黒龍「今回の質問はここまでです。次回も楽しみにしています」

新八「そう言う質問すんじゃないエエエエエ！！」

黒龍「あれま」『ぎやははははは！向こうの新八がロリコンにぎや
はははははは！』

銀八は黒龍さん所の新八を見て笑っていた。

咲「一つ目だけど」

新八「何で毎回毎回黒龍は僕をいじめるんだアアアア！殺してや
るうううううう！」

新八は黒龍の元へ走っていった。

銀八「勝てないのによ。まったく、で二つ目だが」

銀時「新八……ロリコンに落ちたか」

咲「新八さん……変態だよ？」

神樂「ぶはははははは！アニメオタクにもなって、更にロリコンになったアルか！ぶはははははははは！」

銀時と咲は軽蔑し、神樂は大笑いした。

咲「三つ目だけど……新八だね」

咲はそう答えた。

銀八「プププツ、『黒龍』さん！もっと新八をいじめてやってください」

咲「質問は以上です」

銀八「質問を待ってるぜ！」

コラボ！闇鍋が始まるよー by ナナフシ（前書き）

ナナフシ「今回はゲストに申し出てくれた読者が二人います！感謝します！キャラクターの喋り方に間違いや不自然な所があれば指摘してください！」

銀時「その二人は誰なんだ？」

ナナフシ「それは見てからのお楽しみだアアアアア！」

咲「それじゃあ、始めます！」

コラボ！闇鍋が始まるよー by ナナフシ

万事屋メンバーは何故か、何処かの和室に居た。そこには、作者であるナナフシも居た。

そして、全員……大きめのコタツに入っていた。

「いやあ、温々ですなア」

ナナフシがそう言う。

「おい、何でコタツが大きいんだ？」

銀時が訪ねた。

「それはゲストが来るからですよオ、もうスタンバイしています！」

「本当！」

咲は驚いた。

「さてと……長々と寒い廊下に待たせるのは何ですからっ」と

「誰が来たんでしょうか？」

「楽しみアル！」

新八は疑問に思い、神楽は誰が来たか楽しみにしている。

「まずはこの人達です！」

ガラッ。

入ってきたのは、女二人と男二人だった。

「自己紹介をしてもらいましょう！」

「初めまして、わしの名前は蘿蔔です」

女の人が挨拶をした。

「私は悠宇^{ゆう}です」

もう一人の女が挨拶をする。

「俺は遊馬^{ゆうま}だ」

男の一人が挨拶をした。

「僕は由利^{ゆり}です」

「……よろしくお願いします」「……」

蘿蔔さん達は挨拶をする。

「まあ、立ってるのはなんなんでコタツに入ってください」

ナナフシが言うと四人は入る。

「さて、次ですね」

「あ、わし達の他にも居るんですね」

「はい、それではどうぞ！」

ガラッ。

入ってきたのは、男一人、女三人、女の子三人が来た。

「まずは、『黒龍』さんが書いている“リリカル銀魂ライダー”異世界鎮魂歌」から来ていただきました。男の方から自己紹介して
いってもらいましょう」

「俺は天道ソラだ」

結構な二枚目の男の人が挨拶をした。

「私はアリスだ」

こちらは美人な人が挨拶をした。

「私はアリア」

こちらも美人な人が挨拶をした。

「ソラのサーヴァントのセイバーです」

こちらもまた美人な人が挨拶をした。

「ソラ様のユニゾンデバイスのリリスです」

可愛い女の子が挨拶をした。

「この体にしかないんです」

ナレーションをキッと睨んだ。

すみません。

「私は高町なのはです！」

栗色の髪をした可愛い女の子が挨拶をした。

「私はフェイト・テストロッサです！」

金髪の可愛い女の子が挨拶をした。

「では、コタツにどうぞどうぞ」

『黒龍』さん所のキャラクター達がコタツに入る。

「さてと、これで全員ですね」

ナナフシが言うと立ち上がる。

「それでは……どうぞ」

襖が開き、鍋を持ったロボットが入ってきた。

コタツの真ん中に置くと……沸々と泡がなっている。

色も何かやばい。

「ナナフシイイイイ！これは何だアアアア！」

銀時が大声で叫んだ。

「え？何って闇鍋をするんだよ……でも、これだったら電気消す必要ねえか」

ナナフシはそう言った。

「ナナフシさん！何入れたんですか！」

蘿蔔さんが訪ねた。

「え？暗黒物質^{ダークマター}と物体Xと食材」

ナナフシは平然と答える。

「おい、物体Xって何だ？」

遊馬は訪ねた。

「これ」

ナナフシは虹色をした物を出した。

「『黒龍』さんから許可を貰って出しました」

「そんな許可を貰うなよ」

ソラはツツコンだ。

「あれ？思えばここに余ってるじゃん。えい」

物体Xを闇鍋に入れた。

「さて……食べますか（黒笑）」

ナナフシは黒い笑みを浮かべた。

「変わったなナナフシiiiiiiii！」

新八はツツコンだ。

「さてと……」

ナナフシは箸を鍋にのばした。

アリスと由利も何かに気が付いたのか鍋に箸をのばした。

「ちょ、由利！絶対危ないよ！」

悠宇が止める。

「心配ないよ」

由利はそう答えた。

「アリスさん……大丈夫なんですか？」

なのはは心配そうに聞いた。

「心配ない」

アリスもそう答えた。

「さてと……」

三人が具材を掴んだと同時に！

「「新八にシュート！」」

「何で僕ううううう！」

新八に向かって何かの食材を投げつけた。

ベチャッ！

新八に直撃した。

「hがおjたらじゅおいあjふぁkじふおあうおいふぁじよいjふ

あああああああああ！」

ドサッ。

志村新八 リタイア。

「新八いいいいいい！」

銀時は新八に近づいた。

「何してんだデメエ等！」

「僕は新八で威力を試したんです」

「僕は新八、嫌いですから」

「私はDSだからな」

銀時の問いにナナフシ、由利、アリスが答える。

「最悪だよこの三人！」

咲は大声でツツコンだ。

「さてと……どうしますかね」

正直……誰も食べたくない。

新八に直撃した具材を見ると黒い物体と化しており、元が何かかわらない。

「やっぱり、電気消す必要なかったですね」

ナナフシはそう答えた。

「さアて、次は」

ナナフシが箸を鍋にのばす。

万事屋生き残り三人は危険を感じて、ナナフシよりも先に鍋に箸をのばし……。

「……ナナフシにシュート！」

ナナフシに投げつけた。」

「g k あうおいうじょいあじたじょいg d j ギあじょいあじょいじ
がおk あじょいあじょいあじょい！」

ドサッ。

ナナフシ リタイア。

「ナナフシさんが……倒れちゃった」

蘿蔔さんは顔を青くした。

「さて、これで俺等がやられるなんてない！」

「そうだね」

「そうアル」

三人が安心した途端。

ベチャッ。

銀時の顔に闇鍋の具材が直撃した。

「k j g あうおいg じゃs j といあじたじおg じゃいぎおじぎあー！
ドサッ

坂田銀時 リタイア。

「……銀兄さん（さん）」

咲となのはが銀時に近づいた。

別次元の銀時でもなのはは心配するのだ。

なんせ銀時LOVEだからね。

投げつけたのは……アリスだった。

「またあなたですか！」

「面白いじゃないか」

アリスはドSの笑いを浮かべた。

「なら！えい！」

咲がアリスに投げつける。

「よつと」

アリスはそれを避ける。

そして投げ合いが始まった。

「銀兄様に何するんだ！」

そのまま由利も乱入。

「おい、大丈夫かよこれ」

ソラは心配になってきた。

「にゃー、当たらない様に気を付けしないと」

アリアはそう言った。

「このままアリスを殺れば！」

フェイトは立ち上がる。

フェイトはソラLOVEだもんな。

って言うかやるが殺るになつてるし！

そのままフェイトも乱入した。

「咲！協力するよ！」

フェイトは咲の味方についた。

「エスカレートしてきてませんか？」

セイバーは呆れ半分でみていた。

「このままだと、皆喰らっちゃいますよ？」

蘿蔔さんはそう言った。

「由利を助けるよ！遊馬」

「おう！」

悠宇と遊馬も乱入した。

「更にエスカレートしれるよオ！」

なのははハラハラしながら見ていた。

更には……。

「にゃく、私も」

アリアも乱入した。

フェイトと同じ考えだろうな。

でもアリアなら二人を殺りそうなんだが……。

「私も！」

リリスも乱入した。

「これ、本当に大丈夫か？」

ソラは呆れていた。

「何とも醜いですね」

セイバーもそう言った。

「そうですね」

蘿蔔さんがそう言った。

そして……。

ガンッ！

鍋が宙を舞った。

「あ？俺は一体？」

「僕も何が？」

銀時とナナフシが起きあがった途端……。

ベチャッ！

鍋の具材がすべてかかった。

「「gじゃおじょいあほいあじょいgじゃおいjこいありふいはい
おがおいじあひ！」」

ドサッ。

二人は鍋ごと喰らい倒れた。

「やばい！」

咲は叫んだ。

銀時がゆらりと立ち上がる。

「銀時無事だったか……？」

ソラが銀時に訪ねたが銀時からどす黒いオーラが出ていた。

「こんなにまずいもん食わせやがって……」
ドンドン上昇する。

「私達の所の銀時と違う気が……」

セイバーも冷や汗を流す。

「ぎ、銀さん？」

悠宇は訪ねる。

「嫌な予感しかしない」

遊馬が言う。

「僕達の所の銀兄様とは違う……」

由利も嫌な予感がした。

「銀さんが恐いの」

「うん」

なのはとフェイトは抱き合っていた。

「 teme等……」

更に上昇。

「おい、ちよつとやばくねえか？」

ソラも嫌な予感がした。

「死ぬ覚悟出来てんだろうなアアアアア！」

銀時は木刀を抜き、畳に叩きつけた。

バキバキバキ。

家が壊れる音がした。

ドカン！

家が崩れた。

『ぎゃあああああああ！』

皆は下敷きになった。

ソラは無言。

結局、皆……リタイア！

くおまけく

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「はい、質問に答えるぞ。今回のアシスタントはこの人」

葵「白瀬葵です」

銀八「出番全然ないのにね」

葵「気にしているんですから言わないでください！」

銀八「悪かったな。それじゃ、質問行くぞ。ペンネーム『蘿蔔』さんからの質問」

葵「あ、今回の闇鍋に参加していたよね」

銀八「そうだな読むぞ」ありがとうございます！
またまた質問

オリキャラ達の髪型を教えてください！あ、あと闇鍋ですが

「僕なら行きますよ！

お妙さんの卵焼き案外美味しかったですもん。
砂糖多いですけど

蘿蔔達も逝かせます！」

「「「え！？」「」」

「具には勿論あの卵焼きを」

「ちよつ由利イイ!？」

「ニヤリ（黒笑い）」

面白かったです！

楽しみにしてます！

『だそうだ。一人一人教えるぞ』

咲 腰まであるロングヘアー

葵 サイドポニーテール

陰子 ポニーテール

雷雅 天然パーマ

猛刀 ショートカット

毒仔 短めのポニーテール

銀八「これでどうだ!と言う訳で『蘿蔔』さん。廊下に立ってなさい」

葵「次はペンネーム『黒龍』さんからの質問『新八^{ナナフシ}」黒龍ウウウウウウウウ!!!」

銀時「あ、新八が怒りの形相で来た」

黒龍「ならば、物体X発射!!!」

大砲でぶっ放した物体Xが新八の顔面に炸裂する。

[illegible]

新八の断末魔が木霊した。

黒龍「じゃあアリス、後はお願いします」

アリス「仕方ないな」

アリスは新人を担いでナナフシの所に向かった。

黒龍「では、問題は排除した所で、言う事がまず、ゲスト出演の依頼をします。出演する方は、ソラとアリスとアリアとリリスとセイバーとフェイトとなのは辺りでお願ひします。あ、キャラが掴めない、数が多いなどの問題がありましたら、どうぞ出すゲストは変えてもらって構いません。それと、もし他のゲストが良い場合は言うてください」

ソラ「俺か」

アリア「にや……大丈夫？」

リリース「だ、だだだ大丈夫でう！！ぜぜぜぜぜ絶対生き残ってみせまう！！」

セイバー「語尾が変になるくらい動揺してますが……」

フェイト「ど、どうなるんだろ？」

なのは「なんか、酷い目に遭いそうだよ……（涙）」

黒龍「では、最後に質問します」

1・そっちの万事屋メンバーに質問。うちの小説で一番気に入らないキャラは誰ですか？ いなければ言わなくて結構です。

2・咲に質問。銀さんが“結婚しよう”と言っていましたけどどうしますか？

3・新八に質問。彼女いないのは主人公である銀さんが女性を惹きつけてしまうせいだと知ったらどうしますか？（黒笑）

銀時「相変わらず難癖のある質問だなおい！」

黒龍「では、次回も楽しみにしています」『この人のキャラクター参加していたよね』

銀八「ああ、それでは質問を答えます。一つ目ですが」

銀時「あのマヨラーだ！マヨラー！」

咲「私もマヨ方さんかな」

神楽「あのドSアル！」

新八「僕は……そっちの僕自身……だってロリコンになってんだもん」

銀八「あ、新八向こうの新八を嫌った。二つ目ですが」

咲「銀兄さん！本当！結婚しようよ！」

銀時「いや、それは黒龍の嘘だから」

咲「銀兄さん！」

銀時「どわああああああ！」

銀時は走って逃げ出す。

銀八「むかつくな……三つ目だが」

新八「銀さんのせいかアアアア！」

銀時「新八も来るなアアアア！」

新八は木刀を持って銀時を追いかけた。

銀時「こんな質問した黒龍の所に行って嘘を証明してやるうううううう！」

銀時は逃げながら黒龍さんの元へ向かった。

銀八「咲と新八まで行った」

葵「まあ、最後の質問。ペンネーム『亜麻音』さんからの質問『い』質問良いですか？

オリキャラ達が

たくさんいるじゃないですか？

そのキャラ全員の

好きなもの等、誕生日等って全て暗記してるんですか？』それは私も思った」

葵はナナフシを見た。

ナナフシ「たぶん……暗記してないかも……なんかやばいですか？」

ナナフシはダメダメな野郎だった。

葵「じゃ、私の好きな物は？」

ナナフシ「真選組（特に土方）……しか覚えてない」

葵「ダメじゃん！」

銀八「はあい、ナナフシは自分のオリキャラのくせに全然覚えていません」

ナナフシ「悪かったな！新しいキャラクターがドンドン思いつくんだよ！」

銀八「たくつ、それでは質問は以上です」

葵「質問待ってます！」

コラボ！闇鍋が始まるよ　by ナナフシ（後書き）

ナナフシ「ここの銀さんおっかねえ」

咲「こ……恐かった」

ナナフシ「蘿蔔さん、黒龍さん！どうでしたか？こんな終わり方はダメでしたか？」

銀時「ゲストを呼ぶのはどうなるかわからないからな」

ナナフシ「それではまた！」

葵「次回、『第九訓』殺戮の悪魔』です！お楽しみに！」

ナナフシ「由利が銀時を呼ぶ時の『スローライフ』を使わせてもらいました」

第九訓く殺戮の悪魔く（前書き）

ナナフシ「またオリキャラ思いついたぜ」

銀時「またかよ！」

ナナフシ「今回のオリキャラは残酷ですよオ」

咲「サブタイトルからしてやばいよね」

ナナフシ「後、感想が増えてきたやふうふうふううう！」

銀時「あ、壊れた」

咲「よっぽど嬉しいんだね」

ナナフシ「それでは」

銀時「始まるぜ！」

ナナフシ「何であんたら義兄妹は僕が言う所を奪うのおおおおお
！」

第九訓　殺戮の悪魔

「ククク、歌舞伎町に来てみたのは良いが……強者は居るかな？」
とある男が辺りを見回していた。

「ここには狂乱の貴公子桂小太郎も居ると聞くしな」
男は不気味な笑みを浮かべる。

「探してみるか……」

男は人混みに消えた。

場所は変わって万事屋銀ちゃん！

「旦那ア、咲ちゃアん。居ますかア？」

万事屋に来たのは、真選組唯一の女隊士、白瀬葵だった。

「あ、葵ちゃん。何か様？」

咲は葵に近づき訪ねた。

「いや、てかまずお邪魔しますくらい言えよ」

銀時は葵にツツコンだ。

「すみません。旦那達に話しがあつて来たんです」

『話？』

万事屋メンバーは首を傾げた。

葵はソファに座り、向かい側には、銀時達が座っている。

「で、話って何だ？」

銀時は訪ねた。

「あ、ええとですね。最近この町に“殺戮の悪魔”が来たらしいんですよ」

『“殺戮の悪魔”？』

万事屋メンバーはまた首を傾げた。

「本名、魔樋^{まとい} 殺斗^{さつと}。元殺し屋です」

「そいつがどうしたんだよ？」

「いえ、最近ではこの町に来て殺人を行っているのです」

「殺人ですか……」

新八は少し冷や汗を流す。

「はい、それが女子供関係なくです」

「最悪だね」

「まったくアル！」

咲と神楽は許せないで居た。

「更には、その人が殺した奴は五体がバラバラで見つかるんです」

「殺しを楽しんでやがるな……」

銀時も深刻な顔をした。

「だから旦那達も気を付けてください」

「わあつた」

「それでは」

葵は万事屋を出て行った。

「……俺……ちよつくら出掛けるわ」

「え？危ないですよ！」

「大丈夫だって」

銀時は新八の言う事を聞かずに出て行った。

銀時は人気のない所に来た。

「おい、ここそついて来てないで姿を出せや」

銀時が言くと男が現れた。

「ククク、バレてましたか」

銀時が振り返るとそこには、黒髪で、赤い瞳をしている男が居た。

「あなた……相当の実力者ですね？」

「お前か……“殺戮の悪魔”って言うのは」

「はい、俺が“殺戮の悪魔”です」

「俺に用か？」

「もちろん……」

男から殺気が漂う。

そして、銀時は木刀を、殺斗は刀を抜く。

殺斗の刀は、柄と鞘が黒く、鍔もついている。

刀身は赤かった。

「あなたを殺す事です！」

一気に銀時の目の前まで移動した。

「喰らえ！」

殺斗は刀を振り上げた。

「ちっ！」

銀時は後ろに飛んで避けた。

そして、すぐさま殺斗の間合いに入り、居合いの構えをした。

「オラアアア！」

銀時は思いつきり木刀を振り上げた。

「ぐぶっ！」

殺斗に直撃する。

殺斗は宙を舞うがすぐさま態勢を立て直し、着陸した後……銀時に

連続で斬りかかる。

銀時はそれを防ぎ始める。

「アハハハハハハ！」

「ちっ！この殺人魔が！」

銀時は殺斗の刀を弾き、隙が出来た所に突きを放った。

だが……。

バシィ！

「なっ！」

なんと、横から銀時の突きを掴んで止めていた。

「甘いですね!」

殺斗が刀を振り下ろそうとする。

「ちっ!」

銀時はすぐさま殺斗の腹に蹴りを入れて、蹴飛ばした。

殺斗は吹き飛ばされて地面に寝転がった。

銀時は飛躍し……。

「喧嘩は剣だけでやるもんじゃねえ!」

木刀をそのまま殺斗に振り下ろした。

「ぐぼオ!」

殺斗の腹に直撃した。

(雷雅程じゃねえが、雷雅の次に強い!)

銀時はそう直感した。

「ゴホゴホ……やるねお兄さん……」

殺斗はニヤニヤ笑っている。

「だけど……こうでなくちゃ面白くない!」

殺斗は走り出した。

銀時も走り出した。

「ハア!」

「ダラア!」

ガキイイン!

銀時の木刀と殺斗の刀がぶつかり合う。

「ハアアアアアア!」

「オラオラオラオラオラオラ!」

銀時と殺斗の攻撃がぶつかり合う。

そして……。

ガッ。

「なっ!」

銀時は驚いた。

「喧嘩は剣だけでやるんじゃないんだろ?」

殺斗は銀時の足を引っかけたのだ。

「喰らえ！」

そのまま銀時に刀を振り下ろした。

「くそ！」

銀時は素早く手をつき、後ろに体を飛ばした。

だが……。

バサッ。

銀時の体に切れ目が入り、血が出る。

「おいおい」

銀時はそれを見て、そう言った。

「隙だらけだぜ！」

殺斗は銀時を刺そうとした。

「待てよ」

その時、誰かの声が聞こえた。

雷雅だった。

「またかよ」

銀時はそう言った。

「俺の獲物だ……そいつは」

雷雅は殺斗は睨んだ。

殺斗は恐怖ではなく……面白い相手を見つけた様な顔をしていた。

「雷雅……テメエ行く所行く所現れやがって」

「俺は銀の兄貴を見張っているんだ」

雷雅はニヤリと笑った。

「もう良いでしょう……このお兄さんも本気じゃないし……余興が

冷めた……」

殺斗は刀を鞘にしまい、歩き出した。

「また会おうね。お兄さん」

殺斗はニッコリ笑いながら去っていった。

「さてと……またボロボロだな……俺はこれでさらばとさせてもら
う」

雷雅も姿を消した。

“迅雷”の異名は伊達ではない。

「……」

銀時は黙り込んでいた。

しばらくして万事屋に戻った。

余談だが斬られた所は……適当に何か言っ流した。

くおまけく

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「はあい。質問する人も増えてきたので、質問の部分しか乗せない事にしました。今回のアシスタントは」

雷雅「疾風雷雅だ。よろしくな」

銀八「相変わらず不気味だな。まあ、良いや。質問行くぞペンネー

ム『蘿蔔』さんからの質問

『「皆さんボカロ好きですか？」

「だとしたらどんな曲が好きなの？」

ジャックラッセルテリア好きー？

豆柴はあゝ？ゲハッ

「なにわけのわからない質問してるんですか？」

い……や……犬……ず……き……かど……うか……をね……グアッ

「……ウザイニコツ（黒笑い）」

「今回も面白かったぞ」はい、皆に聞くと時間がかかるので、万事屋メンバーと雷雅に答えて貰います」

銀時「そうだなア……『千年の独奏歌』辺りか」

咲「そうだね……『あなたの歌姫』かな」

新八「僕は『ルカルカ ナイトフィーバー』ですかね」

神楽「私は『裏表ラバーズ』アル！何か面白い曲ね！」

雷雅「そうだな……『ローリングール』辺りか」

銀八「雷雅が答えた！」

雷雅「ダメかよ」

雷雅は薙刀を構える。

銀八「いえ……」

ナナフシ「犬はどうなんでしょうね……オリキャラは咲と雷雅は好きと言う設定です」

ナナフシが代わりに答える。

銀八「と言う訳で『蘿蔔』さん！廊下に立ってなさい」

雷雅「次はペンネーム『黒龍』さんからの質問だ。『ソラ』質問はどうする？」

アリス「では、私がするでしょう。新八に咲に質問だ。お前はナンパされた事があるか？ その場合はどうする。ちにみに私はナンパされた時は散々食事を奢らせるがな。あ、性的に襲おうとしてくる時はボコボコにしたな」

リリス「至極どうでも良い質問ですね！？ それと悪質ですよそれ！！」

セイバー「次は私です。咲。あなたはどのような信念を元に剣を持つているのですか？」

ソラ「最後は俺だな。銀時に質問だ。咲を養うだけの食費はそっちにあるのか？」『まずは一つ目だな』

咲「ナンパはされた事がありますが、断ってます。性的に襲われそうになったら私は一撃で気絶させます」

銀八「だそうだ。二つ目だが」

咲「またですね。私の信念か……銀兄さんの様に私の大事な者に手を出す人は誰であろうと斬るよ。私は仲間を護る為に剣を握っているの」

銀八「だそうだ。三つ目の質問行くぞ」

銀時「咲のか？ 一樣ギリギリだな。最近パチンコにも行ってねえし……咲に禁止されて……」

銀八「咲が家計を支えている様です。と言う訳で『黒龍』さん廊下に立ってなさい」

雷雅「次で最後だ。ペンネーム『流叶』さんからだ。『質問を送らせて貰いたいと思います。』

1 なんで眼鏡しんはちはモテない事は既に決められたこの世の理ことわりなのにそれを理解しようとしなんでしょうか？

2 銀時様に対してのあの暴言は許せません。一回新八に「お通ちやんなんか大ッ嫌いだ！」なんて言わせてみてはいかがでしょうか？

3 咲さんに質問です。銀時様は全てにおいてすばらしいのはもう銀魂ファンなら誰でも知っている絶対的条件、そんな銀時様の事を咲さんはどこまで好きなんですか？

4 もしその銀時様カワイそつなタマゴに暗黒物質を薦められたら食べますか？』だそうだ。一つ目だが」

新八「いや！それはまだわからないね！僕にはまだ希望がある！」

銀八「……虚し……二つ目だが」

新八「言う訳ないでしょ！」

ナナフシ「えい」
ブスッ！

新八「ちょっ！何を入れたんですか！」

ナナフシ「この薬は面白い物だよ（黒笑）」
そう言うとなナフシはお通を連れてくる。

新八「お通ちゃんなんか大ッ嫌い！あれ？」

お通「ひどい！」

ガッン！

新八「グバラ！」

新八はお通にギターで殴られて気絶した。
更には……。

親衛隊「隊長オオオオオ！お通ちゃんが大ッ嫌いとはどういう事だアアアア！」

新八「ぎゃああああああ！」

親衛隊の奴らにもボコボコにされた。

ナナフシ「これで俺は満足（黒笑）」

銀八「本当に変わったなおい！」

雷雅「はあ、三つ目だが」

咲「すべてだよ！昔っから銀兄さんの事を色々知っているもん。思えば子供の頃は一緒にお風呂入ってよね」

銀時「ガキの頃だろうが」

銀時はツツコンだ。

銀八「カーツペ」

雷雅「きたねえな。最後の質問だが」

咲「……ぎ、銀兄さんの為なら！」

咲は断言した。

銀八「こいつならやるかもな！『流叶』さん廊下に立ってなさい」

雷雅「質問は以上だ。質問があればくれよ」

第九訓 殺戮の悪魔（後書き）

ナナフシ「強敵現る！」

銀時「雷雅の次に厄介だな」

ナナフシ「ここからどうなるか！お楽しみに！」

咲「次回は殺斗のキャラ紹介だよ！」

ナナフシ「それでは！」

殺斗のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「暇だからキャラ紹介投稿」

銀時「本当に暇人だな！」

ナナフシ「暇人で悪かったな！それでは……どうぞ！」

殺斗のキャラ紹介

名前 魔槌まづい 殺斗さつと

年齢 23歳 誕生日 6月29日

好き 不明

嫌い 不明

髪 黒色

瞳 赤色

元殺し屋の殺斗。

“殺戮の悪魔”と恐れられていた。

剣の腕もなかなかである。

銀時に目をつけている。

殺しを楽しみ、殺して奴の五体をバラバラにする。

ナナフシ「もうすぐ8000アクセス行きそうだ」

銀時「よかったな」

ナナフシ「そして僕は思った」

銀時「何だ？」

ナナフシ「またゲストを呼んだ何かをしねえか？」

銀時「またかよオオオオオオ！」

ナナフシ「いやあ、面白そうじゃん。ゲスト呼ぶのも良いじゃん！」

咲「次は何をやるの？」

ナナフシ「そうだなア……闇鍋やるか……また別のネタをやるか……

……そうだなア……そうだ！」

咲「何？」

ナナフシ「ほら、あれ、シュークリームが置いてあって、その内の

「やつはわさびって言うやつあるじゃないですか？」

銀時「何だっけ？」

ナナフシ「それやりません？ 僕の知恵不足はわかってますが……中身はもちろん暗黒物質で」

銀時「おいおいおいおいおい！ お前変わりすぎいいいいいいいい！」

ナナフシ「それでは、ゲストを待ってます！後書きに制限を書いときます」

殺斗のキャラ紹介（後書き）

何か忘れたけど上のやつ通りに参加する人は申し出てください。
次回のネタにします。

- ・銀魂の原作キャラクターは出せません。（だって居るから）
- ・オリキャラ、もしくはクロスオーバーしているキャラクターが参加出来ます。

- ・作者も参加可能。

- ・まあ、どんな風に書いてもナナフシに任せると言う人はお願いします。

ナナフシ「こんな感じか……さてと、待ってます!」

コラボ2！ロシアンルーレットが始まるよー by ナナフシ（前書き）

ナナフシ「次は三人です！申し出たの！って言うか俺が誘った！」
銀時「もうお前俺に変わってるし！」

ナナフシ「もうこの小説内では俺で行かせてもらおう！」
咲「わかった」

ナナフシ「それでは……地獄のロシアンルーレット始まりだアアア
アアア！」

コラボ2！ロシアンルーレットが始まるよー by ナナフシ

銀時達、万事屋メンバーは何処かの家の前に立っていた。

「おいおい、またナナフシの野郎がやらかすぞ」

銀時はそう言った。

「またゲスト呼んだからね」

咲が言った。

「銀時達か」

後ろから声が聞こえ、振り返るとソラ達が居た。

「あ、テメエ等やっぱり誘われて来たか？」

銀時がソラ達に訪ねる。

「ああ、そうだ」

ソラが短めに答える。

「あれ？一人増えてませんか？」

新八がヤミに気付く。

「こいつはヤミだ」

ソラが紹介する。

「咲はよろしくですね」

ヤミがそう言った。

「向こうでは銀兄さん達の仲間だったね」

咲はヤミにそう言った。

「あ、皆さん揃ってるんですか？」

ソラ達の後ろから蘿蔔達がやって来た。

「テメエ等も誘われた訳か」

「ええ、まあ」

蘿蔔はぎこちなく答える。

「あ、蘿蔔さん」

更に後ろからは女の人二人が来た。

「あ、サヤだね？」

「はい、私も誘われました」

霜月サヤが挨拶した。

「私は霜月さんが書いている小説“妖と夜叉”のオリキャラの奴良リオです」

リオが挨拶した。

その時だった。

ガラッ。

「いやあ、皆さんよく来ましたね」

ナナフシが出てきた。

「おい、そのお前の後ろから見える湯気は何だ？」

銀時は訪ねた。

「え？暗黒物質ダークマターと物体Xを混ぜて作り出したクリームです」

ナナフシはそう答えた。

「それはつまり私達に死ねと言っているのか？」

アリスは訪ねた。

「どうでしょうか（黒笑）」

「絶対そうだろオオオオオオ！」

新八はツツコンだ。

「まあ、部屋に入ってください」

皆は部屋に入った。

「さて……はいこれ。まずはシュークリームから」

ナナフシはシュークリームを取り出した。

「どれが混ぜたやつかなア 二つあるから気を付けて」

ナナフシは面白がっていた。

「つまり、確率は19/2!？」

リリスはそう言った。

「そうなりますなア」

ナナフシが答える。

「それでは皆さん取ってください」

皆は適当に取る。

「とりあえず食おうぜ」

遊馬ゆうまの言う通りに皆はまた適当に取った。

そして……。

「……」おあじおあぎゃおいじおあじよいがじおじゃいおじい
あじよいぎゃお!」「……」

倒れたのは……咲と遊馬とリリスと神楽だった。

「咲iiiiiiiiiii! 神楽アアアアア!」

「おい、リリス大丈夫なのか?」

「え? 遊馬まで倒れちゃったよ!」

蘿蔔は遊馬まで倒れた事に驚いた。

「あ、手紙がある」

ソラはそれを見た。

「何々『更にまずく作りました 蘿蔔の所のあなた達三人でも耐え
られません』最悪だな」

「oooooooooooooooooooo! ならこの四人は可愛そうじゃねえかアア
アア!」

ソラは呆れ、銀時はツツコンだ。

「これは死ねって言ってますね」

「確かに」

セイバーとヤミがそう言った。

「にやゝこのままだと全員やられるよ」

アリアの言葉に皆が固まった。

そして最後に……エクレアが出てきた。

「また手紙だ。私が読むね『これで最後です。生き残れるのは八人
です つまりこれには五個入ってます 絶対食えよ』だって」

リオが読み終える。

「いや、無反応はないでしょ」

サヤはツツコンだ。

「いや、大抵は予想ついてるから」

リオはそう答えた。

「そ……それじゃ……誰が生き残るか勝負だ！」

銀時が言った途端皆は取った。

そして食べた。

「ふおあkじょfじゃいおjgつ あgvjfgじふいおs
j!」

倒れたのは、セイバー、ソラ、悠宇、フェイト、なのはだった。

ソラは無言である。

「おい、ナナフシから聞いたんだがな」

銀時が冷や汗を流しながら言い始める。

「何ですか銀兄様」

由利は訪ねる。

「セイバーがまずいもん食うと……」

セイバーはゆらりと立ち上がった。

「おのゝれ」

セイバーの姿は変わっており、黒いオーラが出ている。

生き残りメンバーは冷や汗を流した。

あ、アリアとアリスは真顔だ。

二人は逃げだそうとする。

「行かせるか！」

銀時が先に回り込み、二人を止めた。

「ちっ！」

「テメエ等がそう言う事をするのはもう小説で見知っている！」

銀時はそう言った。

セイバーはソラを見て驚いた。

「主！貴様等アアア！」

「待て待て待て！」

銀時は止めようとしたが……。

黒セイバーと化したセイバーは『ダークエクスカリバー暗黒の勝利の剣』を放とうとする。

「問答無用！」

『あああああああああ！』

皆は巻き込まれた。

セイバーに食わせるところなるからね。
また全員……リタイア！

くおまけく

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「はあい、質問に答えるぞ。今回のアシスタントは」

殺斗「魔槌殺斗だ」

銀八「何でこいつ！まあいいやペンネーム『霜月サヤ』さんからの
質問

『質問いつちやいますく！

公式がもはや新八「メガネになっているけど、それについてどう思
います？ご本人さん。

私は良いと思うけどね。

もう1つ、最近あったラッキーな出来事は？

これはどなたでもいいです。』はあい、一つ目に答えるぞ」

新八「何でだアアアアア！僕が本体だぞおおおおおお！」

銀八「黙れ眼鏡掛け機！では二つ目の質問。これは誰か」

銀時「金を拾った」

銀八「おい！つと言う訳で『霜月サヤ』さん廊下に立ってなさい」

殺斗「次だな。ペンネーム『黒龍』さんからの質問『黒龍「まあ大抵の人間はそうだと思います。では、質問いきましよう」」

1・新八にこのスイッチをあげます。このスイッチを押すとあなたの望んでいた彼女が出てきます。（実際は押すと腹を空かせた雌ライオンか、マッチョの水モのオッサンが出て来る）

2・咲と銀さんに質問。銀時×土方のBL小説があるそうですが、それについてどう思いますか？

3・咲に質問。もし新八のアイドルオタクを止めさせると銀さんとデートできるとしたらどうしますか？』はい、新八」

銀八は新八にスイッチを渡す

新八「えい！」

新八がスイッチを押すと……。

「うほ、いい男」

マッチョで水モのオッサンが出てきた。

「やらないか？」

新八「いやアアアアア！」

新八は逃げ出した。

銀八「……二つ目だが……ププ」

銀時「おええええええええええ！」

銀時は思いつきり吐いた。

咲「銀兄さんが……BL……」

咲は聞いて……。

咲「マヨ方さん！死んでください！」

土方「あくまでも小説だろうがアアアア！」

土方は逃げ出した。

銀八「……三つ目だが……」

咲「はい！止めさせます！」

咲は土方を追いかけるのをやめて言う。

新八「よくも変なスイッチ渡したなアアアア！」

新八は暗黒物質と物体Xを混ぜた物を投げつけた。

銀八「おい！という訳で『黒龍』さん、そっちに混合された物が行ったので気を付けてください」

殺斗「最後の質問だな。ペンネーム『蘿蔔』さんからだ」質問です

外面はドMみたいになってるけど

実際はドSですよ？

銀魂1のドSなんですよね？」

銀八「いや、沖田だろ！全然あいつドSじゃないじゃん！」

殺斗「俺もドSじゃないと思うが」

銀八「と言う訳で『蘿蔔』さん廊下に立ってなさい！」

殺斗「質問待ってるぞ」

コラボ2！ロシアンルーレットが始まるよー b y ナナフシ（後書き）

ナナフシ「次回はどうしようかな」

銀時「おいおい」

ナナフシ「黒龍さん、蘿蔔、霜月サヤ、これでよかったでしょうか？」

銀時「おい、何で黒龍以外タメ口？」

ナナフシ「許可を貰った」

銀時「おい！」

ナナフシ「それでは訂正の部分があつたら言ってください！」

第十訓 冷血の鬼姫VS迅雷（前書き）

ナナフシ「もう暇すぎて暇すぎて」

銀時「おい」

ナナフシ「思いついたから出しちゃえって感じで」

銀時「おいおい」

ナナフシ「今回は銀八先生はお休みです。すみません」

咲「それではどうぞ」

第十訓　冷血の鬼姫VS迅雷

（雷雅さん……変わっちゃったな）

咲はそんな事を考えていた。

攘夷戦争で出会い、高杉の様に変わってしまうとは思わなかった。

咲はそんな事を考えながら歌舞伎町を歩いていた。

すると、咲は誰かにつけられている事に気付いた。

「……………」

咲は歩き出して、人気のない所へ行った。

「誰ですか？」

咲は止まって訪ねた。

「あれ？やっぱりバレてたか」

咲は声を聞き、振り返る。

現れたのは雷雅だった。

「よお、咲の姉御」

雷雅はニヤリと笑った。

「何か用？」

咲は訪ねた。

「何……俺と一戦交えてもらおうと思ってなア」

雷雅は薙刀を取り出す。

咲は木刀を抜く。

「殺り会おうぜ。ククク」

雷雅は不気味な笑いを浮かべた。

それと同時に……。

「俺は目の前だぜ？」

雷雅は咲の目の前まで移動していた。

「オラア！」

雷雅は薙刀を振り上げた。

「くっ！」

咲は素早く後ろに下がり、連続で突きを放つ。

「アハハハハ！」

雷雅は薙刀を前に出し、円を描く様に回した。それにより、突きはすべて弾かれる。

「後ろが空き！」

咲は素早く雷雅の後ろに回り込んでいた。

「ハア！」

咲は木刀を振り下ろした。

「ぐっ！」

それが雷雅の背中に直撃する。

「面白い」

雷雅はニヤリと笑うと姿を消した。

「俺を捕らえられるかな!？」

そう言った途端、咲の体にドンドン切れ目が入る。

「くう！」

咲は一生懸命防ごうとする。

「やっぱり銀の兄貴の様には無理か!？」

雷雅はそう言った。

「オラア！」

雷雅が目の前に現れ、棒の先端で咲の腹に突きを放った。

「ブッ！」

咲は吹き飛ばされて地面を転がった。

「まだまだ！」

雷雅は飛躍し、咲の上で刃を咲に向けた。

そのまま落ちていき……。

ドスッ。

刺さる音が聞こえた。

「刺さったか……な！」

雷雅は驚いた。

咲は顔を横にずらし、ギリギリ避けていた。

「こつちから行くよ！」

ガンッ！

鈍い音が聞こえた。

それは咲が木刀を横薙ぎに振り、雷雅の顔面に直撃したのだ。

「まだまだ！」

咲は銀時の様に剛剣ではない為、連続で攻めて怯ませる事にする。

「ハアアア！」

咲は連続で斬りかかる。

「こんなやつ！」

雷雅は防ぎ、咲に蹴りを入れた。

「くう！」

咲は怯んだ。

そして……咲は……。

「！！顔が変わったな」

雷雅がそう言った。

咲の顔は無表情に変わっていた。

無表情なのに鬼の様な鋭い目線。

これはもう完全に“冷血の鬼姫”と化した。

「行くぞ！咲の姉御！」

雷雅は咲に向かって、薙刀を横薙ぎに振った。

咲はそれを受け流した。

「ハアアアア！」

咲が木刀を横薙ぎに振った。

「こんなもの！……が！」

横から来ずに上から木刀が来た。

「そうか……あの剣が」

雷雅はそう言った。

「ぶつ、がつ、ごつ、ぐつ！」

雷雅はドンドン叩き込まれていく。

上から来ると思ったたら右斜め上から、下から来ると思ったたら右から

と全然違う所から現れる剣に苦戦していた。

「だが！読めた！」

ガキイイイン！

なんと雷雅はそれを防いだ。

「！！！」

咲は驚いていた。

雷雅に受け止められた事に。

「ククク、咲の姉御……やっぱり銀の兄貴より弱いな」

雷雅は不気味な笑いを浮かべる。

「その舞いの様な剣を受け止めたのは……銀の兄貴くらいだろ？」

雷雅はそう言った。

「残念だったな。だけど俺もこれを完全に防げる訳じゃねえがな！」
ドカア！

雷雅は咲を思いっきり蹴飛ばした。

「ぶっ！」

咲は地面を転がった。

「ククク……だけど俺もボロボロだな……引き分けた。それじゃあな。次会う時は……殺す」

雷雅はそう言つて去っていった。

「雷雅さん……強い……」

咲はそう呟いた。

「ククク、やっぱり俺を楽しませてくれる。あの義兄妹は……ククク」

雷雅はそう呟いて消えた。

第十訓 冷血の鬼姫VS迅雷（後書き）

ナナフシ「咲が苦戦！」

咲「強いね雷雅さん」

銀時「ある意味恐ろしいな」

ナナフシ「雷雅はどう関係してくるか見ていったらわかる！」

銀時「それではまた次回！」

第十一訓　流星の忍（前書き）

ナナフシ「またオリキャラ。&オリジナル組織思いついた」
銀時「おいおい」

ナナフシ「と言つ訳で始まります！」

第十一訓　流星の忍

万事屋に來客が來ていた。

「何の用だツラ？」

それは桂とエリザベスだった。

「ツラじゃない桂だ。銀時、最近の雷雅の行動を知っておるか？」

桂はいきなり雷雅の事を言い出した。

「それがどうした？」

銀時は桂に聞き返す。

「最近だがな。組織らしきものを作り上げたと聞いてな。そこには戦闘狂の奴らが集まっているんだ」

「組織……」

桂の話を聞いて咲は呟いた。

「あの、銀さん」

「何だばつつあん」

「その雷雅さんって誰ですか？」

「そうアル」

新八と神楽は雷雅を知らない。

「昔の馴染みだ」

銀時はそう言っておいた。

「で、その組織の名前は？」

咲は桂に訪ねた。

「うむ、組織名は“雷撃”だそうだ」

「“雷撃”……」

銀時はそれを聞いて呟いた。

「銀時氣を付けた方が良くぞ。お前は狙われているのだから？」

桂は訪ねた。

「ああ」

銀時は短めに答える。

「じゃあな」

桂は言う事を言うたと去っていった。

銀時達はそれをしばらく考えた。

「寒いな」

銀時達は外を出歩いてた。

「ちよつ、銀さん！ここ人が少ないですよ！あんた仮にも命狙われてるんでしょ！」

新八はそう言った。

確かにここは人通りが少ない。

雷雅に狙われてもおかしくはない。

銀時はそれをわかっておきながら来ている。

すると、目の前に女が現れた。

「“白夜叉”と“冷血の鬼姫”とお見受けする」

銀時と咲は反応した。

「もしかして雷雅の使いか？」

銀時は訪ねた。

「まあ、そうですね」

女は答える。

女がそう答えた瞬間だった。

クナイが飛んできた。

「ちっ！」

銀時と咲と神楽は木刀と傘を振って打ち落としていく。

「うわああああ！」

新八は一生懸命避ける。

「ぱつつあん！大丈夫か！」

銀時が振り向くと……。

頭にクナイが刺さっていた。

「あの……銀さん……刺さってます」

ズボッ！

クナイを抜くとそれを隠した。

「え？何が？」

「いや……今それ……完全にブツ刺さってましたよねそれ……大丈夫ですか？」

「え？何言ってるの？何もブツ刺さってないよほら」
銀時は平然とする。

「いや、あの血だらけだし無理しないでください」

「いや、だから刺さってないって」

銀時と新八は言い合いを始めた。

「銀ちゃん、キメる所はバシッとキメろよ」

神楽の頭からも血が出ていた。

「神楽ちゃんも刺さってたよね！」

咲がツツコム……が。

「あんたも刺さってただろオオオオオオオ！」

新八が咲を見てツツコンだ。

咲の頭からも血が出ているからだ。

「何だよあんた等！全然防げてないじゃん！」

新八は三人にツツコンだ。

「アハハハハ！面白いね君達」

女は万事屋メンバーを見て笑う。

「行くよ！」

女は腰から小刀を抜く。

そして銀時に斬りかかった。

ガキイイイン！

銀時はそれを防いだ。

「オラア！」

銀時が木刀を思いつきり振り、女を後ろに下げる。

「デメエ誰だ！」

銀時は訪ねる。

「私は星斑^{ほしむら}忍^{しのぶ}。“流星の忍”って恐れられてたんだア」
女は忍と言う。

「だから……雷雅程じゃないけど……」

忍は目の前から姿を消す。

「スピードはあるよ？」

「ぶっ！」

その声が聞こえた途端新八の声が聞こえた。

後ろを振り向くと新八は蹴り飛ばされていた。

「新八！」

銀時は走り出して、忍に向かって木刀を横薙ぎに振った。

忍はそれを見るとジャンプして交わした。

「なっ！」

銀時は上を見る。

「喰らえ！」

忍が銀時目掛けてクナイを投げ込む。

「ちっ！」

銀時は後ろに飛んで避ける。

「ほあちゃあああああ！」

神楽が傘で忍を殴り飛ばす。

「ぶっ！」

忍はそのまま地面に叩きつけられる。

「僕だつて！」

新八はさっきの蹴りから復帰して忍に向かって木刀を振った。
だが……。

ガキイイイン！

木刀を小刀で防がれた。

「なっ！」

「まずは君からね！」

空いている左手にクナイを取り出し、刺そうとした時だった。
ドカァ！

「ぶっ！」

忍は吹き飛んだ。

見ると銀時が居た。

銀時が木刀で忍を吹き飛ばしたのだ。

「さすがに部が悪いか？」

忍はそう言った。

「私を忘れてるよ！」

咲が忍に向かって木刀を振った。

「くっ！」

それを小刀で防ぐ。

「ハァ！」

咲はそのまま忍に蹴りを入れた。

「がっ！」

忍は蹴り飛ばされて地面を転がった。

「まだまだ行くぞ！」

銀時達が走り出した時だった。

「！！！」

銀時達は走るのをやめた。

目の前に雷雅が現れたのだ。

「ククク、よオ、銀の兄貴、咲の姉御、それとその仲間さん二人」

雷雅の顔はニヤリと笑っていた。

新八と神楽も恐ろしさを感じた。

「さすがに四対一じゃ部が悪いよな……」

雷雅は忍を見て言う。

そして忍を担ぐ。

「くっ、すまない」

忍は雷雅に言う。

「ククク、銀の兄貴達には敵わねえよなお前じゃ」

雷雅は笑っていた。

「また会ったら遊ぼうや」

雷雅はそう言うのと去っていった。

「銀ちゃん……今の雷雅アルカ？兄貴と……変わらないね」

神楽は雷雅が神威と重なってしまった。

「……」

銀時は黙り込んでいた。

雷雅が姿を消してからもしばらく万事屋メンバーはそこに居た。

くおまけく

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「はあい、今回も質問に答えるぞ。今回のアシスタントは」

猛刀「獣牙猛刀だ」

銀八「お前かよ！まあ、良い。質問行くぞ」

猛刀「ペンネーム『蘿蔔』さんからの質問『質問

ツラが髪切って紅桜編の時髪型でいたらどう思いますか？

「長い！

てかなんで

マトリョシカなの！？」

「デユラララ知ってますか？

ふしぎ遊戯も？」『蘿蔔』さんすまんが歌詞を載せるのは不可能だ。載せた途端消される」

銀八「すまん。それで一つ目の質問だが」

銀時「これ、俺で良いのか？誰宛か知らねえが答えるわ。変だと思
う」

銀八「ちゃんと誰に書いたか書いてくださいな。二つ目だが」

ナナフシ「何故マトリョシカを急に！？」

銀八「さあ？三つ目だが」

ナナフシ「デュララは知ってます。ふしぎ遊戯は知りません」

銀八「だそうだ。それでは『蘿蔔』さん廊下に立ってなさい」

猛刀「次だ。ペンネーム『霜月サヤ』さんからの質問『質問は、今回のコラボで私のところのリオに会ったけど、みんなどう思った？一言でいいから教えてくださいな。』

新八に一言、新八のメガネに、志村新八（新八のメガネ）Ｔシャツがグズズされるんだから、もう諦めろや。』だそうだ」

銀八「一つ目だが……代表として万事屋メンバーで」

銀時「そうだなア、まず妖怪の孫って言うのに驚いたわ！」

咲「ぬらりひよんの孫なんだよね。でも、そうには思えなかったよ」

新八「全然違いますからね。僕も本当にぬらりひよんの孫なの！と思いましたもん」

神楽「凄いアル！今度妖怪の姿見せてほしいアル！」

銀八「だそうだ。二つ目だが」

新八「だから、何でもいつも僕だけの質問はいじめばかりなんだアアアア！後諦めてたまるかアアアア！」

銀八「だそうだ。と言う訳で『霜月サヤ』さん廊下に立ってなさい」

猛刀「次で最後だ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問『黒龍』では、質問にいきましょう」

1・新八に質問。自分に美少女の彼女ができたところを想像してみてください。それで、そんな新八の妄想を見た時の銀さんと神楽と咲の反応は？

2・雷雅に質問。うちの小説で一番戦いたい人は誰ですか？

3・ナナフシさんに質問です。ナナフシさんが知っているアニメやマンガってなんですか？その中で一番好きなのはどれですか？」だつてよ」

銀八「一つ目の質問だが」

新八「え」と

~~~~~  
「新八さん！」

「あ、 ちゃん！」（名前は勝手に想像してください）

その後、二人でデートをする

~~~~~

新八「えへへ」

新八はそんな想像をしている。

銀時「新八…… 虚しいぞ」

咲「ちゃんと現実見れば良いのに」

神楽「ぱつつあん、痛い子アル」

銀八「残念だったなぱつつあん。二つ目だが」

雷雅「そうだなア、そっちの魔導士とやらとも戦ってみてえが、ソラとアリスとアリアとセイバーとライダーとヤミとライホースとも戦ってみてえな…… だが、ソラと戦ってみてえなア。ククク」

銀八「と言う訳で雷雅はソラと一番戦いたいそうです。最後の質問だが」

ナナフシ「そうですね、知っているアニメや漫画だと、銀魂、魔法少女リリカルなのはシリーズ（Vivid以外は見ている途中ですけど）、ぬらりひよんの孫、緋弾のアリア、灼眼のシャナ、NARUTO、焼きたてジャパン、ガンダムシリーズ、ひぐらしのなく

頃に、とある魔術のインデックス、フェアリーテール、家庭教師ヒットマンリボーン、テガミバチ、うえきの法則、ワンピース、DO
G DAYS……」

銀八「語り出したらキリがないだろ。とりあえず一番好きな奴言えよ」

ナナフシ「銀魂！」

銀八「やっぱりな！」

ナナフシ「面白いじゃん」

銀八「ハア、と言う訳で、『黒龍』さん廊下に立ってなさい」

猛刀「質問待ってるぜ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5198y/>

銀魂～冷血の鬼姫の日常～

2011年11月27日15時55分発行